

---

# IS 魔法使い転生者in IS world

シャラシャラン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 魔法使い転生者 in IS world

### 【Nコード】

N3371X

### 【作者名】

シャラシャラン

### 【あらすじ】

あつ…俺死んだのか

え、他の世界にいけるの?!?!?まじで?!?!?そんじゃ俺は…此処へ…!

え、チートも!?まるでどつかの二次小説みたいだな…

まあいいや、いっちょいきますか…!!

このお話は基本原作よりですがリジナルもいれていきます。たまにキャラ崩壊などがありますが気にしないお方はどうぞお読みくだ

さい！！意味不明な事も出てきますが気にしない方はお読みください。

ちなみに更新は不定期です。

すみません……

でもなるべく速いようにします！！

プロロ・グ 死んだ…の？（前書き）

初めてです!!

誤字や脱字があったら教えてください!!

ではごじげん!!

プロログ 死んだ…の？

「はあ、きょうも学校疲れたな…」

俺はいつも登校と一緒にのびんだ道を通っていた。商店街を通り地下鉄に乗り家から一番近い駅に帰る。

あゝ家帰ったら何しようかなあゝ。宿題は無いし新しいゲームを買うにも金少なすぎるし。あつ電車来た。

ん

「あつ、家帰ったら昨日買った小説の続き読もつと」

うし決まり。あゝ家の駅に着くのあるし寝るか…おやすみ

zzzz

「ふああー、ついた」

寝ぼけながらも進む俺

そしていつもどりの横断歩道を渡ろうとしたとき

「え？」

世界が反転した

「嘘…だろ？」

その後俺は道路際に投げ出された。グシャッと嫌な音がしたがそんなのおかまいなしだ。それよりか今自分がどんな状況なのか知れない。だがすぐにそれを説明する物を見つけた。

「これは、血？」

嘘だろおいおいおいおい。先生の言ってた事って本当だったんだな、一定した痛みを超えたら痛みが無いのって。

俺死ぬのか？

(まだ、生きたいか?)

あたりまえじゃねえか、まだ俺学生だぞ?

(まあ今回は私も悪いからな……今回だけだぞ?) ニヤッ

「えっ?」

目の前は真っ白だった。下も上も右も左も真っ白。

「どこだ……ここ」「ようこそ」!?!?」

後ろを振り向くと和服を来た人がいた。

えっ?和服?

「生と死の狭間へ」

そしてそいつはノンキに紅茶を飲んでいた

プロロ・グ 死んだ…の？（後書き）

今回は短めにしました!!

これから愛読をお願いいたします

プロローグ2 俺、転生します(前書き)

はい

二回目です

よろしくお願いいたします



## プロローグ2 俺、転生します

俺の目の前にいる人（？）はきれいな紺色の和服に身をつつみ、高級そうなカップで紅茶をオフィスチェアで飲んでいた。

……なんというかシユールな風景だ。

その人はキレイなブロンドヘアを腰あたりまでたらしっていた。

いや、それよりか気になる事がある。

「ここ……どこだ？」

そう、俺はさっき車に跳ねられて道路際に投げ出され死んだはず

そう

死んだのだ

はあっ、っとブロンドヘアの人が溜息をつく。

「だから言っただろ。ここは生と死の狭間だよ」

「やっぱ俺、死んだのか？」

「ああ、そうだ」

ズズッと紅茶をのむ。

あっさり言われた。

「つてかその前にあんた誰?!?!?」

「神様だ」

「か、神様あゝ?」

へ、へえゝ

か、神様つていたんだね

「いやいるぞお前の目の前に」

「心読まれた!?!?」

「ああ読んだぞ。何たって私は神様だからな」

「もういいよ信じるよ」

ガクっとうなだれる俺

「…:すまないな」

「え?」

「いや、今回お前が死んだのは私のせいなのだ」

え？

「そうだうつかり私の弟子の【見習い神様】が死のノートの書き間違いをしてしまったのだ。本当にすまない」

「え？いや、そんないいですよ」

「そのかわりと言ってはなんだが他の世界に飛ばしてやる、あとチートも」

「え、まじで？」

思いつきり顔を上げる俺。

最後すごい事をサラツと言ったよな

「うん、まじで」

何だこのどっかの二次夢小説みたいなお話は。ってか本当にあったんだな転生とチートってあったんだな。

「で、どこ行きたい？二次元もオツケーだぞ」

えっそうなんだ

そうだなどこ行こうかな…

緋○のARIAもいいよな、あと銃○とか……あっ、とある○書もいいよな

「うん」

「はっはっは、なやめ若者」

一時間後

「うん」

「やっぱなやむな、長い！いい加減早く決めろ！」

「だってよそれで俺の第二の人生の背景きまるんだぜ」

「いやそうだけどさ、さすがに悩みすぎだ」

うし、決めたぞ

「よし何処だ」

「俺はISの世界に行くぜ！」

「はあ、やっときまったよ」「ヤレヤレ」

「次はチートだな」

「ああそうだ……時間をあまりかけるなよ」

「いや大丈夫だ。もう決めてある」

「ほうでは聞こつ」

「まず身体能力向上だろ。その次にティーズオブシリーズや他の  
魔術と剣術をたのむ」

「ふむふむ」

「あとせつかくISの世界に行くんだからISを乗れるようにも

しといてくれ」

「あ、それは大丈夫だ」

「え？」

「それはISの世界を選んだときについてくる特典だ」

「あ、そうなんだ…」

「んじゃ想像した武器を実体化する能力をくれ」

「すごい発想だな…チートすぎるだろ」

「え、だめなの？」

「いや一応オツケーだ」

オツケーなんだ…」

「あとISの知識をてんこもりにくれ」

「了解つと、それだけか？」

「なんだ？まだいいのか？」

「まだ容量的にあと何個か大丈夫なんだが」

「いやもういいや。あと適当に良いやつとめといて。あ、でも変な奴入れるなよ」

「はいはい、わかりましたよ」





そして俺は何処までも暗い闇の中を落ちて行った

と、思いきや

「あれ？」

目の前には木製のドア。

右には勉強机。

その隣にノートパソコン。

反対側には本棚。

いわゆる普通の部屋だった

「ぶじだ、じじ」

ピンポン

チャイムがなった

プロローグ2 俺、転生します（後書き）

今回は前回よりか長く書きました

いや〜書くの楽しいですね

## 設定（前書き）

まだ未定のところもあるので短いです

何かいいアイデアがあったら教えてください

## 設定

平崎 勇也 (ひらさき ゆうや)

年齢 15歳

身長 178cm

体重 70kg

髪型は緋弾のアリアのレキの髪型の黒色で、顔は中性的な顔立ちで髪が長かった頃はよく女性と間違われた。それにより髪をバツサリ切った。目は茶色。

前世のときは大学生であったがIS学園に通いたいので年齢をさげてもらった。

趣味は音楽観賞や本を読むこと。実は昔色々な格闘術をかじっていたため、白兵戦ではかなりの実力を発揮できる(一部チートのおかげ)

チートにより神様から身体能力向上、ISとISの知識や、テイルズオブシリーズと他の魔法や剣術を頭にたたきこんでもらった。他に頭の中で想像した武器を実現させるという能力を持っている(自分で言いながらもちょっとチートすぎると思っている)。発動したときにしか使えない。

まだまだチートはいけると言われたが、神様にまかした。残りはかつてに神様が入れた。

性格

明るく他人とのコミュニケーションを好む。相手がどんな人だろうと気安く話しかける。

ちよつと天然、そして天然たらし。(一夏よりかはだいぶまし)

専用IS

??????

## 設定（後書き）

これが設定です

他にいい案があったら教えてください。

第一話 いざ、学園へ（前書き）

はい

原作にやっとちかずきました



## 第一話 いざ、学園へ

へえ〜ここが俺の家か…

俺は神様に植えつけられた記憶を頼りにし家の中を歩いている。  
一人部屋とゆう設定らしい。

ピンポーン

あ、でもマンションなんだ。  
にしては広いな

ピンポーン、ピンポーン

あったこれが端末か後でチェックするか  
チートってどんな感じなんだろうな、やっぱテイルズの魔法だから  
手から火とか出るのかか

あ、こんな事している場合じゃなかった、チャイムが鳴ってるんだ  
った

ピンポーン、ガチャ

「はい」

「出るのが遅い。」

あ、この人は……

「まあいい。君が平崎勇也君か？」

「は、はい。あなたは……」

「織斑千冬だ。キミのクラスの担任の教師をすることになってい  
る」

そうあのISの世界の中で最強の称号を得たあの織斑千冬だ。  
という事は俺は無事にこっちの世界に来れたということだ。

………何とか、あまりシツクリこないような

「何をほづけている。行くぞ」

「え?どこに?」

「何を言っている、IS学園だ」

そうだった俺はISが乗れる事になっているのだった。  
え?でもそれだったらバレル理由なくない?

(それは私が政府に差出人不明で手紙を送ったからだ)

この声は…!

(そうだ私だ。神様だ)

お前、よくもあのときは…ビックリしたんだぞ！  
あんな事があるんだったら先に言えよ！

（ままいいだろ。それより先に状況説明をするぞ。今日は4月1日  
で始業式だ）

始業式？

（そうだ。お前は現在二人目の男性のIS操縦者として世間に知ら  
れている）

え？まじで？

（ああ、そうだ。だから織村千冬が迎えにきたのだ、人が群がらな  
いように）

なるほど

「おい、何をしている。はやく着替えてこい」

「あ、はい」

(制服はタンスの上から二番目のところに入ってるぞ)

ん、ああ、ありがとう

そついえば何で俺らは声を出さずに喋れるんだ？

(私とお前だけの間のテレパシーだ)

そんなことができるんだな

「よし着替えたな」

いかにもできる女、織村千冬が言う

「はい」

「では行くぞ」

「え？織斑さん貴女が運転するんですか？」

「ああ。後織斑先生と呼べ」

「了解しました」

俺達は快適にドライブをし学校に向かった  
俺は会話をせずと端末と記憶を照らし合わせていた。

そんな中先に口を開いたのは織斑先生だった。

「そういえばお前は専用ISを持っていると資料に書いてあった  
のだが、本当なのか？」

やはりもうどこかの企業に属しているのか？」

「あ、いやどこにも属していません」

「ほう。ならなぜISを持っている？」

「……………」

どうしよう何て答えよう。

さすがに神様にもらいましたっていたら笑われるだろうし……

でも何て言おうかな先に吐いちゃおうかな  
そっちの方が楽だし

うんそうしよう

(あっさり決めたな、オイ)

「後でそれについては説明しますので待っていてください」

「……わかった」

ワオすんなりオツケーしてくれた。

## IS学園

「んん、やっとついた」  
背伸びをしあくびをする

「行くぞ、ただでさえ時間が押しているんだ。  
お前は始業式にすら出ていないんだぞ」

「はいはい」

ヤレヤレとてを手を振る

「はいは一回でいい」

うわ思いつきり睨まれた、怖

「は、はい。すみません」

「わかつたらならいい、行くぞ」  
そして踵を返し歩きだす

こりゃ、主人公がビビルのもわかるは。  
鬼だこの人は。人の皮をかぶったおにだ。

#### 一年一組前

「ここで待ってる。呼ぶから後で入ってこい」

「わかりました」

はあ、やっとだ

これから俺の第二の人生が始まるんだ



「よし、入ってこい」  
織斑せんせいと言った。

よし行くか。

そして俺は新しい人生の扉を開いた

その数分前

—夏side

はあさっきの自己紹介はまずかったかな？  
…  
しまいには千冬姉にぶたれるし

はあゝ不幸だ

「ではあと一人紹介する。」

「え？あと一人いるんですか？」

副担任の山田先生がきく。

「ああ、例の二人目の男のIS操縦者だ」

え？あと一人いるのか？

これはうれしいことだ何たってこの人数の中で一人だけの男子だからな

後ろからの視線もいたい。

共感できる仲間が増えることはうれしい

「よし、入ってこい」

ガチャッ

「平崎勇也ともうします。」

これから始まる物語に

その物語を知る者が入った

そしてだれも知らない物語が始まる

第一話 いざ、学園へ（後書き）

はい

終わりました





「は、はい」

容赦ないなこの人

「さ、シヨートホームルームは終わりだ。諸君らには、これからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくとも返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

本当に鬼教官だな、織斑千冬は。

只今一時間目の後の休み時間

後ろからの視線が痛いです

本当に、ウーパールーパーを見るような目で見られている

まあいいか。



この原作の主人公に話しかけますか

「なあ、君が織斑一夏か？」

「ん、ああそうだけど」

あ、なんかちょっとグツタリしてる

「さっき自己紹介したと思うが平崎勇也だ。下の名前で呼んでくれ」

「織斑一夏だ。一夏ってよんでくれ」

「よろしく。しっかしお互い災難だな」

「ああそうだな。……それよりさっきの授業の内容意味わかった？」

キュピインッ

こ、これは原作の内容だな

まあここは……

「当たり前だろ。知らないとその先不便だぞ」

神様、チートをありがとう

「そ、そうだな。」

ははつと、乾いた笑い方をする

「…ちよつと、いいか？」

「「え？」」

お、でたな篠ノ之箒

「箒？」

「少しこいつを借りてもいいか？」

まあ当然答えは

「あ、うん。いいですよ」

そして連れ去られて行く一夏

さあもうすぐ授業だから席についておきますか

「・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

スラスラと教科書を読みあげる副担任の山田先生

ペラペラとページをめくり、意欲を削ぎ落されたような顔をする一夏

駄目だなアイツ

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

「え？」

さあすがにビックリした。そういえばこんなストーリーだったな

「織斑くん以外で、さっきの話はわからないっていう人はどれくらいいますか？」

シーン

「え！！勇也も?!?!?」

「当たり前だ。今の段階でわからない方がおかしいぞ」

はあつと鬼教官が前にでる

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

バシイイイン

「必読と書いてあったらだろつがバカ者」

ぷぷっ

バーカバーカ

「それより平崎、なぜお前は知っている?」

「え?」

まさか話がふられるとは思ってなかったので変な声をだす

「お前は入学が急で参考書は行っていないはずだ」

ヤバ、どうしようまたもやピンチ

本当にこの人には先に吐いておいた方がよさそうだな

「あ、は、はいあのちょっとパソコンで自主学習を……」

どうだ！通ってくれ

俺のウソオオオオオ！！！！

「そうか。お前はまだドイツよりはましそうだな。織斑再発行してやるから一週間で覚えろいいな？」

「い、一週間ですか？」

「やれと言っている」

「……はい」

アイの鞭だ、いや脅迫か

只今二時間目の後の放課後

先ほどの話は山田先生が補習を一夏にすることで終わった

そしてまあ今一夏と会話をしているわけだけど

「訊いてます？お返事は？」

コイツがいるのだった

セシリア・オルコット

イギリスの代表候補生だ

そして今一夏がそれについて質問をしている  
代表候補生の意味知らないのだ

そしてセシリアが答えようとする

「国家代表」「国家代表IS操縦者の、その候補として選出される  
エリートのことだ。」「ちよっと邪魔しないで頂けますが！?!?!?!  
?」

そこを早口で俺が説明する

言わせねーよ

なぜだかコイツは小説で読んでても気に入らなかった

ちょっとこの先いじってやるか

そしてちょうどいい所でチャイムがなった

「っ！………またあとで来ますは！逃げないことね！よくって  
！？」

どこに逃げるんだと

「なあ勇也」

「ん？なんだ？」

「なんかいらぬ恨み買ったんじゃのか？」

「そんな事ないよ」

そして俺は席に戻った

まだ後ろを向いていた一夏は出席簿アタックをくらった

「再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

教壇に立った瞬間言い放った

「はいいつ。織斑くんを推薦します！」

ほかの女子が言った

「私もそれがいいと思います！」

「お、俺!？」

「では候補者は織斑一夏……………他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

俺やるっかなあゝ

面白そうだし

「せんせゝ。俺やりまゝす」

「わかった。他にはいないか？」



「待つてください！納得がいきませんは！」

そこでパンツと机を叩いて立ち上がったのはあの金髪ロールのセシリアだった

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしです」

パンツ

クラスはいきなりの音でびっくりした

なんせその音は銃声で

その銃を持っていたのは俺だったのだから

「いい加減にしるよ、小娘」

俺は精いっぱいドスのきいた低い声で言う

「どうせその後くだらねえ事を言うのはわかってんだ。そうだからセシリア・オルコット」

思いっきり睨むとビクツと怯えた

おれは銃をクルクル回しながら言う

「どつちみち俺もクラス代表やってみよっかなあ〜って思ってたんだよな。」

「どう？ISどうしの決闘で決めるってのは。噂の国家代表候補生がどれぐらいなのかも知りたいしな」

「え、ええ。か、かまいませんはそれで」

「よし、きた。ちなみに一夏、お前もだぞ」

驚いたような声を出す

「え！俺も!?!」

「当たり前だ。だってお前も候補者の中に入ってんもん」

「い、いやだああああああ」

頭を抱える一夏

「織斑先生もそれでいいですよね？」

「ああ、かまわん……………それより平崎」

「なんですか？」

「銃を没収する」

うっわアウトレート

さっきまで明るくして教室内の空気を和らげようとしてたのに

「はいどうぞ」

そして銃を織斑先生の手の上に置く

まあ、あの銃は術で作ったものだしっか

「ありがとう。あとでついでに色々ときいてやる。覚悟しておけ」

ああ怖い。

「はい……………じゃあ決闘は一週間後の月曜。放課後の第三アリーナで行いましょう。先生予約をしておいてください」

「わかった。織斑、オルコット準備をしておくんだぞ」

「は、はい」

「はい」

ちょうどいい

俺の魔術がどれぐらいISにきくかも知りたかったし

それと

おれのチートすぎる専用ISも使ってみたかったし



第二話 言わせねーよ（後書き）

すみませんセシリアファンの皆さま

嫌われ者にして

### 第三話 これが魔法だ

「寮の部屋が決まりました」

山田先生は俺と一夏にかぎを差し出す

「俺が1026号室で一夏が1025号室か」

「って事はお隣さんか」

一夏は拳を手にポンツと打ち付ける

「あ、でも荷物はどうするんだ？」

「それなら問題ない」

現れたのは織斑先生

「すでに手配してある。着替えと携帯電話の充電器さがあればいいだろう」

ん？俺は？

「お前も一緒だ。着替えと携帯電話の充電器。あとノートパソコンも持ってきといた」

「あ、ありがとうございます」



「それと平崎、今からつもる程の話があるからついて来い」

O H A N A S I ですよ

あゝ何訊かれるんだらう

絶対銃の事訊かれるよ。

えーっと今織斑先生と生徒指導室の中にいます。

正方形の机とパイプ椅子が向かい合って置いてあります

これあれだよな、よく刑事ドラマでみる奴だよな

「立っていずにさっさと座れ」

「はい」

そして着席

(おい、勇也。お前本気でバラスつもりか?)

まあ一人ぐらい知っている人がいた方がいいしな

(魔術もか?)

ああ。もしかして何か問題があるのか？

(いや、ない)

「さて、訊こう」

織斑先生が話を切り出す

「銃の事ですか？」

「それもあるが、ISの方が重要だ。無所属のお前がなぜISを持っている」

うし、洗いざらい吐きますか

「実は俺……………」

それから俺は織斑千冬に全てを話した。チートや魔術、ISの事も

もちろん俺が一度死んでこっちに來た転生者だという事も

先生は何も言わず話を聞いてくれた

「……………という事です。八八、普通信じられませんよね」

「ああ、信じられんな」

うわあっさりと。俺の度胸を返せ！！

「なら信じさせてみよ」

は？

「ついて来い。行くぞ」

「ど、どこにですか？」

「第三アリーナだ」

まじかよ

場所は変わってここは第三アリーナ

そして目の前にはISの訓練機打鉄をまとった

元世界最強、織斑千冬

「さあ、見せてみる。その魔術やらとを」

そして打鉄の刀を中段にかまえる

まじかよ

おい神様

(なんだ?)

ISに当てても大丈夫な魔法ってあるか?

(基本威力、大きさ、形とかは自分でコントロールできるようになってる)

そうか、ありがとう

「よし、いくぞ！織斑千冬！」

俺は火の魔術をえらんだ

魔法陣は手のひらから出てきた

さすがの元世界最強もこれには目を見開いてビクビクしている

「くらえ！！ファイアボール！！」

そして手のひらから炎の球体が形を成してIS向かって飛んで行った

ドカアアアアアン

そして砂煙と爆風が巻き起こる

先生大丈夫かな

なんと先生は

「……く」

膝をついて剣を地面に突き立てていた

「織斑先生！！」

「あ、ああ。大丈夫だ……ぐっ！」

少し出血をしている

確か治癒魔法ほティルズにもあつたはずだ

「ファーストエイド」

パアッと緑色の光が傷口の所に行き傷口をふさぐ

けっこう手加減したつもりだったんだけどな

「すごいな」

傷口が閉じた方の腕を見て言う

「魔法とはなんでもありなんだな」

「ま、まあ……」

頭をかきながら言う

「しかし、さっき疑ったりして申し訳無かったな」

「いや先生は悪くないですよ。誰だって信じれませんよ、いきなり自分は魔術が使えるんですって言われたら」

「それよりさっきの、威力はすごいな」

「え？結構弱めでしたよ？」

「本当か？私はあの時危ないと感じてシールド最大出力で出したのだぞ。それで、シールドエネルギー残量残り0で装甲が一部破壊されて、体にも傷がいつてるのだぞ」

マジですが

「これはオルコットとの決闘を考えた方がよさそうだな」

「……あの解ってると思いますがこの事は秘密にしておいてください」

「ああ、もちろんだ」

よかった

時も場所もかわって今は寮の部屋だ

さっき一夏と一緒に晩飯を食べに行ったのだが

大きなタンコブが頭にできていた

話を聞くと一夏のルームメイトは篠ノ之だったらしい。しかも入浴

中だったらしい。

そして竹刀で叩かれたと

ほんっとラッキースケベだなこいつ

はあ、今日は色々と疲れた

もう寝よう

Z Z Z Z Z Z Z Z

そして一週間後

最初は一夏VSセシリアだった

一夏はこの一週間篠ノ之から教えられた剣道しかしていない

まあこんだだけ粘ってるんだ

上出来だろう



結果、一夏は自分の武器『雪片式型』の特性を把握しておらずSE

シールドエネルギー

が無くなったのだ。

そして、次は俺だ

「はあく。俺かあ」

「大丈夫だよ、勇也だったら勝てるよ!!……それよりお前専用ISは？」

「こいつは使わない」  
そこにいたのは織斑先生だった

「！千冬姉どういっー」

バシンッ

「学校では織斑先生と呼べ。あと平崎アレを使うんだったら、あの程度気をつけるよ」

アレとは魔術の事だ。  
いいのか?と思ってしまう

人前で使うとバレるし

「好きにしる。お前が自分で判断しろ。だがお前のISは気をつ

ける、あれは強すぎる」

「了解です。では最低限武装してまいります」

俺は自分のISの羽だけを部分展開し出撃の準備をした

「うし、行きますか」

「勇也！勝ってこい！」

下で一夏が叫ぶ

「おう！」

「では、平崎勇也行きます！！」

どこかのロボットを操縦する主人公のように出撃する

「なんですの！その武装は！なぜ羽だけなんですの！？」

「お前を倒すのはこれで十分すぎる」

「なめてますの！？！？」

「いや、なめてるのはお前の方だ」



「さあ、パーティの始まりだ、セシリア・オルコット」

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動、  
魔法攻撃付加呪文発動、炎』

炎が俺の刀をまとった

「ああ、どこまで生き延びられるかな？」

**第三話 これが魔法だ（後書き）**

前回間違えてる所があったので修正しました

間違えてる所があったらおしえてください

第四話 Its Magic Time (前書き)

あい今回もがんばりました

## 第四話 Its Magic Time

『では、セシリア・オルコット 対 平崎勇也、始め!』

スピーカーから聞こえてきた音の後真っ先に反応したのはセシリアだった

「くらいなさい!」

奴は主兵装の大口径のスナイパーライフル《スターライトmk?》を俺に向けて撃った

ふっ遅いな

まあ当たってみるか

試したい呪文もあるしな

ドカアアアン

「ふん、しょせんその程度ですね」



「ざーんねん、まだまだだぜ」

俺はシールドをだしていた

それは大きい円で魔法陣が刻んであった

「なんんですか！それは！」

「それだけか？ぜんぜん減っていないぞ俺のSE」  
シールドエネルギー

「！！な、なんですって！」

ついついニヤツと笑ってしまう

「く、ならこれはどうですか！」

セシリアは自分の専用機ブルー・ティアーズからピットを飛ばして俺を攻撃し始めた

俺はそれは高速移動しながら回避して銃を乱射していた

右往左往、上下動いている

正直俺は銃の扱い方を知らないが、下手な鉄砲うちや当たる

あ、当たった

やっと一機目破壊成功

やっぱり銃は扱いにくいわ

俺は銃を魔術で消した

「さっきから貴方は見たことの無い事ばかりしますわね！」

「褒められると照れるなあ。さあ今度はこっちからだ！」

千冬side

「なんだ、あれは！」

さっきからあいつが魔術を使うとイチイチ一夏はや山田先生が騒ぎ立てるのだ

まあ、それもしょうがないだろう

だが、あらためて見てみるとすごいな

あんな早い動き普通はできない

しかも展開しているのは羽だけ

それ以外は何も無いのだ

普通あんな動きをしたら体にGが加わって動きが鈍くなっているはずだ

『さあ今度はこっちからだ!』

画面越しに聞こえる声

さあ何をする平崎……………

S i d e o u t

勇也 s i d e

「行くぜ」



ザアアアアっと刃が霧に向かって飛んでゆく

それは霧の中へと消えて行く

そしてその行方を知る者いない

ビ

試合終了のサイレンが鳴った

『勝者、平崎勇也』

「うっしやい！」

やった！

そして俺はガッツポーズを決める

でも問題がある

セシリアだまだ霧はあるし……………

やばい俺もどうなったかわからん

霧をどけるか

『呪文発動、中止』

おお、消えた

俺はセシリアの状態を見た

そして俺はふと思った

やりすぎた

セシリアの専用機はボロボロで装甲や装備は切れていたり、はずれ

てぶら下がっている物もある。装甲がなくなり切傷もある場所もある。

「うっ」

フラツと揺れたかと思うと落ちて行った

「あ、おい！」

俺はすぐさま駆け寄り彼女を体に引きよせ、抱える

『平崎、そのままオルコットを抱えてピットに戻れ』

無線越しに織斑先生の声が聞こえる

「了解です」

そしてクラス代表決定戦は幕を閉じた

「馬鹿者！」

バシンッ！

「すみません……」

今俺はピットの中で織斑先生の前で正座している

決闘の事について話している。周りには一夏や篠ノ之もいる

ああ、床が冷てえ

「やりすぎだ。馬鹿者、私は言ったはずだぞやりすぎるなと」

「すみません、ほんとうにすみません、だからその竹刀を下してください」

そう俺の目の前には人の形をした鬼が竹刀を持っているのだ

後ろで龍が踊っているのも見える

「それより、勇也さっきの何だよ！」

一夏が俺に問う

「さっきのとは？」

「もう誤魔化さなくてもいいぞ、平崎。お前は公にする事を選んだのだからな」



「うっ！」

反論できない。

正直今のおれにはISと戦う時、選択肢は魔術で対抗するしかないのだ

なぜなら、俺のISは、ほんっとうに強すぎるのだ

「なあ、勇也お前は何を隠してるんだ？」

はあ、喋るか

どっち道、学園中に見られたのだから

「実は、俺

魔術が使えるんだ」

「「「は?」「」」

一夏と篠ノ之、山田先生の声が重なった

「平崎君、嘘はよくないですよ!」

「そうだよ勇也そんなファンタジーみたいな事できるわけないだ  
ろ?」

上から山田先生と一夏

いやいやすでにこの世界がファンタジーの世界ですから……

「平崎の言っている事は嘘ではない。おいちようど良いそこに実  
験体がいるぞ」

そして織斑先生の指を指した方向の先には

セシリアが傷だらけで倒れている

「え？」

「やれ」

はい？

「ちょっと待ってください。落ち着いて、先生落ち着いてください。」

何をさせる気ですか？」

まさか、あれに向かってファイアーボールと言わないよな

「何って、傷を癒してみろ」

ああ、それが  
よかった

「わ、わかりました。では」

俺はセシリアの元に駆け寄り

『治癒呪文、発動』

「ヒール」

セシリアの体が緑色に輝きだす

そしてみるみる傷口を塞いでいく

「「「！」「」」

さすがにビックリ

……さすがにもうこの反応慣れたな

「よし、できました」

袖で汗をふく

「うむ、後で一応保健室に連れていく。これで信じれただろ？」

「す、すげえ」

関心の声をあげる一夏

山田先生なんて、ずっとポカンと口を開けている

「では次は織斑対平崎だ」

「え、まだやるんですか？」

「そっだよ千冬姉、俺負けちゃっよ」

「ああ、ガンバレ」

おう、ひでえこの人

「では、移動だ平崎、反対側のピットに行け」

「了解です」

えーっと

只今移動を終了して反対側のピットにいます

「平崎君、準備は、いいですか？」

山田先生だ

「はい大丈夫です！平崎勇也、発進する」

そして先程戦っていた空へと戻る

「ようー夏」

「ああ」

「手は抜かねえぞ」

「ああ、上等だ」

『ウエツポンクリエーター発動  
ダガーチェイン錬成』

えーっと想像しにくいと思うのですが

感じはRRのバジルの武器（トレンチャー）やソルイーターのブラックスターの壱  
ノ型「鏈黒」を想像してください

って、俺誰に喋ってんだ？

「行くぞ」

一夏が雪片式型を構える

「おっ、こいちゃ。一瞬で終わらしてやる」

『織斑一夏 対 平崎勇也、始め』

今回は最初に俺が動いた

俺はチェインを一夏に引っ掛けるつもりだったが

奴も速い

しょうがない

『加速呪文発動』

パンツとおれは一瞬で一夏の後ろへと周った

「何!?!」

「ふん、遅い!」

俺はチェインを一夏の機体、白式に引っ掛け

「でやっ!」



地面に叩け付けた

だがISはこんなもんじゃ止まらない

「ならば

」

『電撃呪文発動』

「ライトニング！」

俺が放った電機は鎖を通り奴の元へ

「があああああっ」

そしてたつと倒れた

『勝者、平崎勇也』

「いえい！どんなもんだい！！」

そしてピース

俺は失神した一夏のを背負いピットへと戻る

「一夏！」

グッタリとしている一夏によつてきたのは篠ノ之だった

「大丈夫だ、失神しているだけだ」

はあっと溜息をつく

「さすがだな、平崎」

「おほめの言葉凝縮です、織斑先生」

「やめろ、気色悪い」

「ひどいですね」

「まあ、いい。今日はもう寮に帰れ。明日は大変だぞ」

確かにそうだ何たって

人前で魔法をつかったのだ

ま、いいか

寮に帰って寝ますか

そして俺は誰もいない暗いピットの通路を通った

第四話 Its Magic Time (後書き)

戦闘描写をかなりはぶいて申し訳ございません

第五話 new comer (前書き)

はあ

最近パソコンが調子が悪い……

第五話 new comer

「一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がり  
でいい感じですね!」

山田先生が言う

「先生、質問です」

一夏が手を上げる

「はい何でしょうか、織斑君」

「俺は昨日の試合に負けたんであうが、なんでクラス代表になっ  
てるんでしょうか?」

「それは  
」

「それは「それは俺とセシリアが辞退しただからだ」だから私の  
セリフを取らないでください!」

またまた、言わせねーよ

「おい、勇也クラス代表やりたくなかったのかよ!」

「いや、やっぱりお前がやった方がいいのになって思ってたな。ほら俺って強いじゃん。だから一夏に強くなって欲しいから譲るってな。」

「ゆうゆう、そう言えば昨日のあれなんだったの?」

のほほんさんが訊いて来た

はあ、やっぱりか

「もうバレタから言っけどあれは魔法なの」

「魔法?」

「そんな冗談を!」

「あるわけないでしょ、そんなの」

「そっだよ。あつたらこの世の中どんなけ便利か」

「お前ら、平崎の言っている事は本当の事だ。私は身をもって知らされたぞ」

「「「「え?」「」「」

「ほ、本当なのゆうゆう?」

「うん、そうだよ。あの霧も剣も銃も全部魔法だよ」

「へえ」

「今度見せてあげるよ」



「では、話を戻すぞ。織斑、拒否権は無いぞ」

追い打ちをかける織斑先生

「うっ！」

「何たって、貴様は負けたのだからな。クラス代表は織斑だ。わかったか？」

はーいと言う（一夏以外）

いまは四月の下旬

「ではこれよりISの基本的な実践をしてみらう。織斑、オルコット、平崎試しに飛んで見せる」

キュイイインッ

と音共に俺とオルコットはISを展開する  
当たり前だが俺は羽だけだ

「やっとできた」

やっとの事でISを展開する一夏

「よし、飛べ！」

俺とオルコットは軽々と空へと舞い上がる  
遅れて一夏がやってくる

「何をやっている、平崎のISはわからないが、白式はスペック上ではブルー・ティアーズよりかは上だぞ」

「うーん。そう言われてもな」

急上昇は前方に角錐を展開するイメージらしい

「そういや、平崎は何をイメージしてるんだ？」

「俺は思ったと同時に動けるからな」

「……す、すごいなあ」

『平崎は特別だ。普通はそんな事をするのは難しいぞ』

無線越しで織斑先生が解説をする

「なあコツとか教えてくれよ」

「ダメだ。それならセシリアに教えてもらえ」

「え、ええ。よろしければまた放課後に指導してあげますわ。そのときはふたりきりで」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早くおりてこい！」

下にいる篠ノ之が山田先生の無線をパクツて使っている

「織斑、オルコツト、平崎急降下と完全停止をやってみる。目標は地表から10センチだ」

「了解」

「ん、じゃ俺先に行くわ」

俺は急降下をするそぶりをみせて

ISを空中で解いた

「え！」

「なっ！」

「はあっ!?!」

皆似たような驚きの声を上げるが

織斑先生だけは無言だった

俺が何でもできるとでも思ってるんだろっか？

このまま落ちるのも良いが

危ないからやめとこ

俺は地面すれすれのところで魔術を発動させる

『風呪文発動』

俺は足元に自分がちょっと浮くぐらいの風をつくる

ブワッ!!

俺は華麗に着地する

「」「」「」「」  
「おお!?!」「」「」

と周りは声を上げる

「これが魔法だ」

「まったく……いいか普通はあんな事はできないぞ、いいな真似をするなよ」

すぐ後にセシリアが来る

「ほんつと、貴方は変わっている事ばかりなさいますわね。先日  
のあれ以外もできるですか？」

「ん？秘密」

その直後一夏が隕石のように落下してきた

俺は頭をおさえ

「バカだ………」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った」

グラウンドにクレーターみたいな穴ができた

?????side

「ふうん。ここがIS学園か……」

夜、IS学園前に、小柄な体に不釣り合いなボストンバッグを持った少女が立っていた

「君が中国の代表候補生、鳳・鈴音<sup>ファン・リンイン</sup>？」

私の後ろにはIS学園の制服を着た男子がいた

「へえー、良く知ってるじゃない。そうよ、が鳳・鈴音よ。あなたは？」

「俺は平崎勇也だ。勇也って呼んでくれ」

「わかったは、じゃあ私のことも鈴<sup>リン</sup>って呼んで。それよりあなた此処の生徒？男子は一人だけだと思っただけど」

「俺も一応此処の生徒だよ。それより受付に行きたいんでしょ？案内するよ」

「あ、うん。じゃあよろしくね」

あれ？

私受付に行く事言っただけ？

「ええと、それじゃあ手続きはこれで終了です。ISS学園によつこそ」

よしこれでやっと終わった。

「そう言えば勇也、織斑一夏って子知ってる？」

「ああ、知ってるよ。俺と同じ一組だからな」

「ふーん。あつそ」

「素直に一夏に会いたって言ったら？」

え？！何こいつ言ってるのよ！！

「好きなんだろ？」

私は別に………まあ、好きなんだけどね

「へえ〜そうなんだ」

「ちよ、何で心の中がわかるのよ！！」

「まあね。俺は特別だからな」

はあ、疲れる

もういいや寮に帰ろう

「んじゃ、私もう戻るわ」

「うんわかった。あ！あと、一夏を狙っている人多いからね。ガンバレよ」

「う、うるさいわね！」

ああ！もう行こう！

「もうすぐクラス対抗戦だねー。」

「ああ、そうだな」

俺は上の空で答える



「そういえば二組のクラス代表が変わったのよね」  
ほう

もしかして……あいつか？

俺の頭に小柄なツインテールの少女が横切る

「ふんっ！わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら。」

セシリア御冗談を

「「ないない」」

俺と一夏が手を横に振る

「お、今ハモツたな」

「ああ、そうだな」

「どんなやつだろ、強いのかな。」

「今のところ、専用機を持つてるのって、一組と四組だけだから余裕だよ。」

「「その情報古いよ」」

またまたハモる

だが今回は俺と鈴だった

「昨日ぶりだな、鈴」

「そうね、そして私、中国の代表候補生ファン・リンイン・鈴音がラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから！」

「鈴、お前なのか？」

ニコツと笑って言う

「そうよ久しぶりね、一夏」

「何かツッコつけてんだ、似合わないぞ」

「な、何よ！」

「鈴、後ろをミロ」

俺は鈴に忠告をやった

「え？」

ガンツ！

「痛った〜、な、何をする」

「邪魔だ、もうSHRのじかんだぞ。」

そこには鬼が立っていた

「う、千冬さん」

「ここでは、織斑先生だ」

「は、はい。一夏逃げないでね！」「」

どこに、逃げんだよ

っと一夏は呟いていた

はあ

本当に原作どつりだな

新しい武器でも考えておくか

第五話 new comer (後書き)

感想とかぜひぜひください

ご希望も聞きます

可能であればいたしますので！

外伝 **n i g h t b e f o r e : n e w c o m e r** (前書き)

入れるかどうか迷ったあげく

入れることにしました

外伝 **n i g h t b e f o r e : n e w c o m e r**

これは第四話の夜という設定です

「「「「「セーの……」「」「」

「「「「「織斑くん、クラス代表就任おめでとう！」「」「」

ふっ

パーティーか

たまにはこういうレクリエーションも必要だろう

「一夏、よろこべ。皆がお前の為に用意したんだぞ」

「はあ。俺はクラス代表に就任した事は全然嬉しくないんだがな

……」

まあ、いいやもう始めよう

俺は椅子の上に立ち

「皆さん、よくぞ一夏のクラス代表就任パーティーにお越しいただきました」

俺は自分のジュースが入っているカップを持ち上げ

「では、御唱和してください。

乾杯……!……!」

「「「「「かんぱい……!……!」」」」」

そして皆とお菓子を食べだす

「ねえ、ねえ織斑くん一緒に食べよう!」

「私も私も!」

「ちよつと私もですわ!」

皆が寄つてたかつて一夏を引つ張りだこにする

そしてこいつは気づかない

遠くのほうで篠ノ之が睨んでいることを

そして俺は……

「ねえねえ、昨日のあれなんなの?」

「教えてよ!!!」

「特技は?」

と、にたり寄つたりなんだかな

「あれは魔術だよ」

俺はケロツと答える

「へえ、そうなんだ」

「噂できてたけど本当だったのね」



「ああ、本当だぞ」

「「「「!!!」」」」

そこに立ってたのは以外にも以外

織斑先生だった

「お、織斑先生……」

「お前ら、あまり騒ぎ過ぎるなよ。あと、ちゃんと消灯時間には自室に戻るように、わかったな？」

ちょっと周りがビククリしている

実は言つと俺もだ

「どうした、さっきまでのトンチンカン騒ぎは何処へ行った？」

「せ、先生飲みます？」

俺は缶ビールを持ち上げる

「ま、たまには良いだろう」

そして俺の隣にドカッと豪快に座る

プシュッと良い音を立ててビールを開け、そして飲む

「それより平崎、なぜお前がビールを持っている」

「ふっ、先生甘いつすね。俺は魔法使いですよ？」

「はあ〜……普通ここは捕まえるべきなんだろうけどな」

そしてビールを見る

「はい、そうですよ。口止料金ですよ。理解が速い人は助かります」

「……今回だけは目をつぶってやろう、だが飲み過ぎるなよ」

「先生も同じでしょ」

そしてフツと笑う

「そうだな」

「そういえば、魔術の件だが……」

それを言った瞬間周りのどよめきがやむ

「あまり使い過ぎるな、危険だからな。あと、お前ら何回言うかわからんが平崎の言っている事は本当だ。織斑、篠ノ之お前らは目の前で見ただろ？こいつがオルコットの傷を癒すところを」

「え？」

セシリアが驚く

「私の傷が何も無いのは彼のおかげですか？」

「ああ、そうだ。普通あんなに深い傷が体中にあつたら傷跡が残るはずだろ？だがこいつはその魔術とやらを使ってなおしたのだ」

「そ、そうだったのですか……」

うつむくセシリア

なんだこのしんみりした空気は

「あ、あの……あ、ありがとございました」

そう言って頭をさげる

なんだかこうやって感謝されたのは久しぶりかもしれない

「いや、いいよ。俺が作った傷だし」

「それより平崎、お前あの模擬戦手をぬいてただろ」

うっ！

「バレましたか」

おれは不敵に笑う

「まあ俺が知っている限り最強の魔法はありますが使った事がありません」

「試しに使ってもよかったですけど、教えてもらった人によるとその威力は……」

115

ゴクッ

周りから唾をのむおとが聞こえる

「アメリカを軽く吹き飛ばせるらしいですよ」

「」「」「」……「」「」

啞然

ちなみに教えてくれた人は神様だ

「でも威力、大きさ、場合によっては形を変更できるんです。だから、この前織斑先生に撃った下級呪文のファイアーボールだって威力を高くすればISだってチリカスだけを残す事だって可能なはずです」

「へ、へえ」

流す女子

「それより、これでクラス対抗戦も盛り上がりそうだな」

俺は話を変える

「え、私はゆうゆうの魔法もつと見たかったなあ」

「大丈夫だよ、のほほんさん。これからはもっと見れる機会がこの先あるから。たぶんすぐにも見れるよ」

ちよつと織斑先生が反応した

「え〜そうかなあ」

「うん、大丈夫だよ」

そこへ

パンツ！！

「はいはい。新聞部です。話題の男子、クラス代表と自称魔術師に特別インタビューに来ました！」

オーと盛りあがる、一同

「私は<sup>まゆすみかおる</sup>薫子ね。よろしくね。新聞部福部長やっています。あ、これ名刺ね」

めんどくさそうな字だな

「ではまず織斑君！クラス代表になった感想をどうぞ！」

そしてボイスレコーダを向ける

「えーと……」

「まあ。なんとういうか、がんばります」

「えー。もつと何かコメントちょうだいよ」

「は、はははは」

かわいた笑いをする一夏

「んじゃあ、平崎君。ズバリ彼方は魔術師だという噂が流れてますが、それは本当なんでしょうか？」

「あ、はい。それは真実です」

「またまた、いい冗談言っちゃって」

「では披露さしてあげましょう」

イエイ！

やった〜！！

と声を上げる女子たち

「ではちよつと離れて」

「いきます」

『炎呪文発動、フレイム』

そして俺の手のひらの上に炎がともる

「「「「「おおおお……」」」」

「す、すごいねえ……さっきのシャッターに納めたけどいい？」

「かまいませんよ」

「アリ……」

「あとこれ以外にいったいありますか。他にもスプラッター系統だったり心臓をつぶすとか、血を逆流させるとか、体をバラバラとかでいきます」



.....

「……言……」

「俺をおちよくると……」

「殺すぞ？」

ゾクッ……!!

俺は福部長さんをにらんだ

結果

全員が無言

織斑先生がすごい目でみている

「なんて半分冗談ですよ」

おれはニコツと笑う

「半分って……」

「じゃ、じゃあ次はセシリアちゃんもコメントちょうだい」

「では、まず、どうして私がクラス代表を辞退したかということ、それは」

「もういいや。長くなりそうだし。適当にねっ造しとおくよ」

「一夏に惚れたからってのは？」

俺が提案する

「いいねそれ！それで行くうー！」

「なにを！」

顔を赤くするセシリア

「はいはい。もういいや。次は写真撮影ね。さあさあ、三人とも並んで」

「あ、セシリアちゃんは織斑くんと握手して、そして平崎くんは手から魔術を出しといて」

よし

俺はさっきの呪文をもう一回発動する

「それじゃあ、いくよー！」

カメラを構える先輩

「 $35 \times 51 \div 4$ は？」

一夏が答えようとする

「えーと……2？」

「違うバカ。74・375だ」

「正解！」

パシヤ

「なんで全員入ってるんだ？」

さっきの一瞬で全員の集合写真を撮ったのだ

「あ、あのね……」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょ」

「良い思い出になるじゃない」

「う、ぐ……」

反論できないセシリア

「おい、お前らもう消灯の時間だぞ」

「ハーン」

そして俺らの長い夜のパーティが終わった

そのころ

「平崎勇也、あなたいったい何者なの？」

昔の経歴がない彼の資料を見て眩く

「ふふ……オモシロい人、はっけえ〜ん」

そして彼女はパソコンをけした

フリフリのドレスを振り暗闇に消える

外伝 **n i g h t b e f o r e : n e w c o m e r** (後書き)

すみません

本編と混同してしまったらすみません

感想いっぱいください!!

応援メッセージをください!

元気付けられんるんで

第六話 セカンド・幼馴染（前書き）

いいい！

結構何か長がくやっってきた感じがします

ではどうござー！



## 第六話 セカンド・幼馴染

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

只今昼休み

場所はカフェテリア

「お、向こうのテーブルが空いてるな。一緒に食おうぜ。勇也」

「ん？ああ。わかった」

そして俺らはテーブルについた

「鈴、いつ日本に帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしてやんなよ一夏。鈴だって訊きたい事あるはずぞ？」

「そうよ。ってか何でわかったの？昨日だってそうよ。名前はわ

かるけど、何で心の中がわかるのよ」

「俺は何でもわかるぞ。何たって俺は魔法使いだからな」

本当は原作の知識があるからです

「へえ〜、あんたが噂の。うちのお国でもちょっと有名だったもん。ISを使わず代表候補生を倒した男ってね」

「そうなのか」

「ええ、そうよ。うちのお国の人も本気でアンタの事がき回ってるわよ」

(ああ、そうだぞ)

お！久しぶり神様

(スマナイ、しばらく席をはずしていて)

うん、いいよ

何してたの？

(世界各国のお前に対する考えをさぐっていた) 　  
んで、どうだったの？

(最悪だ。色んな奴等がお前を狙いに来ている)

なっ！？

(ドイツやフランス、他の企業や国も死に物狂いで追っかけてる。多分全国の国家代表や代表候補生にも通達が行っているはずだ。調べるとな)

やっかいな事になったなあ

(ああ、気を付ける。なるべく、そいつ等は信用しない方が良いでしょう。用心しておけ)

………わかった

「ん？どうしたの？」

鈴が首をかしげる

「いや。何でもない」

何かこう良さそうな人を疑うのは心が痛い

そこに

「一夏そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！一夏さん、まさかこの方と付き合ってたらしやるの！？」

篠ノ之とセシリアがやってくる

一夏と鈴が戸惑っている

「代わりに説明してやるつ。鈴は一夏のセカンド幼馴染なのだ」

「セカンド幼馴染？」

篠ノ之が訊く

「ああ。篠ノ之が小学校四年生で引越しただろ？その後入れ替わりで鈴が入って来て、中二の終わりだとある事情で中国へと戻ったんだ」

「よ、よくそこまで知ってるわね」

「ああ。色んなことを知っているぞ。例えばお前ら三人の好きな人とか」

「！！！！！！」

そしてビククリするセシリア、篠ノ之、鈴

「お、恐るべし」

「ふふ、次から俺に対する態度とか考えた方がいいぞ？」

三人の目が動揺している

「それより鈴、二組のクラス代表になっただっけな」

ナイス

よく話を変えた一夏

「そ、そうよ。そういえばアンタ、クラス代表なんだってね」

「ああ。ほとんど強制だった」

「ふーん……」

そしてゴクゴクと器を持ち上げてラーメンのスープをのむ

俺はテレパシーを使う

『ISの訓練をみてあげるって言うてらっ…』

ピキーン！

と何かに閃いた顔をする

え？

何でテレパシーが使えるかって？

その魔術を作ったのだよ

「あ、あのさあ訓練私が見てあげなくも無いけど？」

「そりゃ、助か  
」

バンツ！！

「一夏に教えるのは私の役目だ」

「あなたは二組でしょ！！敵のほどこしは受けませんわ！」

顔が怖いぞ

はあもういいや行こう

そして俺は席を立つ

俺は自分の部屋に戻りパソコンをつける

そして開いている画面は

俺のISの画面だ

俺のISは最強なのだ

いきなり言つと変なのだが

代表候補生の専用ISと比べても

相手を瞬殺できるぐらいの強さをほこる

ちなみに俺のISは武装が何一つ無いのだ

最初見たときは意味がわからなかったが

メモ帳にこんなことが書かれていた

「やあ。げんきか？このISは気に入ってくれたかな？  
まずなぜ武装が無いかを説明する。武装などがあると邪魔になるから  
だ。」

お前はそれを創り出す能力を持っているんだ。武器を展開するより

速く出せるんだ。

では、がんばれよ  
神様より」

あと名前も無い

まあいいか

一応納得いくし

バシンッ！

は？何の音だ？

多分、隣だ

要するに一夏の部屋だ

.....



行っ  
て見るか

「何してんだお前ら」

俺の前では篠ノ之の竹刀を部分展開したISで受け止めている鈴がいた

「おい、なるべく静かにしろよ。お前ら織斑先生来たらどうなるのか知ってんのか？」

急遽ISを解除する鈴

竹刀をケースの中に入れる篠ノ之

「よしそれでいい。なるべく静かにしろよ」

今日はなぜかしんどい

部屋に戻ろう

数分後

パアンツ！！

ガチャ

バンツ！！

もう我慢ならん

俺は自室のドアを開けて右を見たら

壁に頭をつけている鈴がいた

斜め45度ノ

って違う

「お、おい。どうしたんだ」

「  
れてた」

「は？」

「アイツ、私との約束忘れてた……」

そして滝のようになみなみと涙を流す鈴

「なるほど。一夏はお前との婚約を忘れてたわけか」

「じ、じじじじじじ婚約って」

顔を真っ赤にして言う鈴

カワイイなあゝ

ってかあいつフラグ立てすぎだろ……！！

「はあ。もういいよわかったよ。とりあえずかんばれ」

「って何よその言い方！！もつとまじな慰め方無いの！？」

「無いよ。とりあえず、みすみすとフラグ立てられたお前にも非はあるぞ。とりあえず、紅茶あげるから持ってかえってのんどけ」

「……はあ、わかったわよ。」

そして俺はポットの紅茶を水筒に入れて鈴にわたす

「ほらよ」

「ん。ありがとう。なんか少し楽になったわ」

え！？さっきので！？！？

「ありがとう」

「ああ。じゃあな」

そして俺は鈴をとりあえず部屋からおいだす

織斑先生にでも見つかったら大変だからな

鈴  
s i d e

はあ

まさか一夏がああ約束を忘れてるなんて

『もし私の料理が上達したら、毎日あたしの酢豚食べてくれる？』

そう、こんな約束をしたのだ

私を重い足を上げて部屋にたどり着く

なんでアイツはあんなに鈍感なのかなあ……

もつとまじな言い方しとけば良かったかもね

なんて恋は苦いのでしょうか

なんて自分視点のナレーターのような事を言う

私は勇也にもらった紅茶を飲む

「甘くないなあ………」

その紅茶は

恋とまったく同じ味がした

第六話 セカンド・幼馴染（後書き）

「勇也が鈴にフラグをたてました」

みたいになりました

実はこれ

まだヒロインがきまっていないんです

要望受け付けます

只のハーレムでもいいんですけどね

感想いっぱいください

第七話 二いつの名前は……

只今、五月

そして今から

クラス対抗戦が始まる

一回戦は運が良いのか悪いのか

一組 対 二組だった

さすが一夏が注目の人だけあるわ

アリーナは満員御礼

ちなみに俺は先生達がいるピットにいる

「もうすぐですね、織斑先生」

「ああ、そうだな」



「その落ち着いた様子だと何かアイツに入れ知恵したんですか？」

「まあな」

「あ、一応ちゃんと弟の面倒は見るんですね、織斑先生」

口をはさんだ、山田先生

ガシッ！！

「ふぐー！！お、織斑しえんしえい。や、やへてくたはい」

ヘッドロックをされて苦しそうにもだえる山田先生

「私は身内ネタで馬鹿にされるのがキライだな」

「ちょ、織斑先生！もういい加減に放してあげたらどうですか！  
？顔が真っ赤になってますよ！！！！」

そして解除する先生

「ほ、ほら。もうすぐ試合が始まりますよ！」

「そうだな」

俺と先生たち、そして専用機組みはスクリーンに釘づけにされる

俺は原作を知っている

故にこれから何が起こるのかを知っている

俺はそっちの方が楽しみだ

開始から数分がたった

一夏は鈴のISシエンロン甲龍の「非固定浮遊部位」アンロック・ユニット  
《に悩まされながらも粘っている》

それよりさっきから一夏が何かを気にしている

「何か一夏が狙ってるっぽいんですけど何をやる気なんでしょう  
か？」

「イクニッション・ブースト  
瞬間加速だ」

ほう、あれですか

世界中のISの知識を持っている俺にはわかる

イグニッション・ブースト

瞬間加速とはその名のとおり一瞬で加速し奇襲をかける技だ

近接格闘装備しかない一夏にうってつけの技だ

教えた人いわく、出し所さへ間違わなければ代表候補生ともわたりあえるらしいです

『ぐあっ!!』

目に見え無いらしい攻撃を受けた

「なんだ、あれは……」

篠ノ之が呟く

「あ、あれは衝撃砲だ。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す。ブルーティアーズと同じ第三世代型兵器だ」

さすがにもう自分の出番を奪われるのに馴れたオルコット

「お、くるか？」

一夏が雪片式型を構えなおす

『うおおおおおー!』

ズドオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

その刹那何かがありーナの遮断シールドを貫いた

「「なっ!!」」

セシリアと篠ノ之が声をそろえて驚く

「来たか……………」

俺は呟く

「!」

俺はきずいていなかった

織斑千冬が反応している事を

「山田先生、すぐに二人に脱出命令を!」

「わ、わかりました!」

「織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがISで制圧に行きます！！」

「織斑くん！？だ、ダメですよ！生徒さんにもしものことがあったら」

「もしもし！？織斑くんきてます！？鳳さんも！きてます！！？」

「どうやら本人達がアリーナに入って来たISを倒すと言いはっているらしい」

「本人達がやると言っているのだから、やらせてみるのもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

先生、それ

「……あの、先生それ塩ですけど……」

あゝあ、言っちゃった

「なぜ塩があるんだ？」



「おお！」

やりおった

これで一件落着

と思いきや

ガシャアアアアン

！！

ん、何？

二体目だと！?!?!?

バカな！！

「山田先生、シールドのクラックはまだか！」

「まだかかります！」

さすがに二体目はあの二人にはキツイと思う

シールド・エネルギーも底を尽き掛けているはずだ

「先生、俺、いってきます」

「「「「!!」「」」」」

「無理だ！お前さっきまでの話を聞いていなかったのか！助けに行くおるかこの部屋からすら出られないんだぞ！」

「そ、そうですね！私も先生としていかせる事はできません！」

「道が無いのならば作ればいい。それに俺は死なないぞ？」

「言ってる意味がわかりませんわ!!」

「行つて来い」

織斑先生が俺につげる

「「「「!!」「」」」」

「お前なら大丈夫な気がするからな」

「ありがとうございます」

俺はピットルームの扉を吹き飛ばし親愛なる友を救いに行くために走った



ウソでしょ!!!

二体目だつて!?!?!

「クソ!」

「下るぞ、鈴!」

一夏はあのISと間合いを開ける

『織斑くん!聞こえますか!?応答してください!』

「山田先生!」

『よかった!さっきそっちに平崎くんが向かいました!』

「勇也が!?!」

『ですから一旦離脱してください!』

「先生それは難しそうですよ。粘るだけやってみます!」

『ダメです!!!織斑く  
』

さあ、どうしようかしら?

額を一粒の冷たい汗が落ちる

「行くぞ、鈴！」

「わかってるわよ！」

私は青竜刀を構へ、突撃

右、左、右、左へと刀を振るうがまったくあたらない

「もう!どうなってんのよ!」

「下れ!鈴!!--!」

目の前に「ロックされています」の文字

「ウン……………」

レーザー発射口が光った

「させるかあああああああああああああああ……………!!」

その時私を慰めてくれた人が目の前にいた

勇也     s i d e

俺は鈴の前に立ちシールドを展開

攻撃を吸収

「ふうく間に合ったあ」

「「ゆ、勇也！！！」」

「よう！大丈夫……………そうじゃないな。ここは俺に任せろ！！お前らはピットに戻れ！」

「ん、何を言ってるんだ！一緒に戦うぞ！」

「無理よ！一夏。私たちがいると邪魔になるもの」

「そうゆうだった。鈴、一夏を連れてピットに戻れ」

「わかったわ」

さあーとと

目の前にいる無人機をスクラップにしますか

「こいよ、俺は最強だぜ？」

俺はISを展開する

いつものように羽根だけではなく、全部だ

たちまち俺の体は輝きISの装甲に覆われて行く

黒と赤の全身装甲タイプだ

ひらたく言えば白式の黒と赤のラインが入ったISだが

性能はその何十倍だ

チートすぎるだろ、これ

「さ、いくか」



「決めたぞ」

（何を打だ？）

「ISの名前だ」

（聞かせてもらおう）

「ヒリヒリ終了符だ」

「理由はこの原作を終わらしたからだ」



第七話 こいつの名前は……（後書き）

まだまだヒロインアンケート募集中です！！！



第八話 苦勞、そして楽しさ（前書き）

学校から投稿WWW  
WWW  
WWW

## 第八話 苦勞、そして楽しさ

あれから数時間

今、一夏がいる病室なのだが……

「どうしてあなたが？……一夏さんは一組の人間、二組の人に  
お見舞いされる筋合いはなくなつてよ」

「何言つてんの？あたしは幼馴染だからいいに決まってるでしょ。  
あんたこそただの他人じゃん」

「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！それに、今は  
一夏さんの特別コーチでしてよ」

「うるさいぞお前ら。静かにしろ」

割り込むぜ

「関係ある、ない関係ないだろ！」

「そ、そうですわね」

「そ、そうね」

うし丸め込めた

「それより、一夏体大丈夫なのか？」

「ああ軽い全身打撲らしい」

大丈夫か？本当に

「まったく、無理をして。さっさとピットに戻ればいいものを、残って戦うなんて」

「あははは」

「よし、一夏。お前が復帰したらお前の訓練をみてやる」

「マジで!？」

「ダメですわ! (よ!)」

セシリアと鈴が叫ぶ

「訓練をみるのは私の役目よ!」

またハモツた

「よし、じゃあ勝負だ」

俺は指を二人に向ける

「勝ったらコイツの訓練をみる」

「いいよ」

俺に勝てるんでも思っているのか？

一夏には強くなってもらわなくては困る

この先、色々な事が起こるが

それを余裕で超えてほしいところだ

「はあ〜」

溜息をつく一夏

ピリリリリリッ

ピリリリリリッ

俺の携帯だ

ポチッ

「もしもし？」

『私だ』

「あ、織斑先生」

『話がある。職員室まで来てくれ』

「わかりました」

ピッ

「んじゃ、俺用事ができたから行くわ」

「ああ、わかった」

「お大事に。それと勝負は後日な」

俺は職員室へと向かう

「来たか」

「はい、それで話とは？」

「ああ。ついて来い」

「え？はい」

俺はついていく

エレベーターだ

俺らは学園の地下五十メートルまで下がる

ここはレベル4権限権限を持つ関係者しか入れない場所だ

「ついたぞ」

そこは研究所みたいだった

そして

例のISが横たわっていた

「解析がすんだそうだ」

「やはり無人機でしたか？」

「ああ、そうだった。国家も無所属、登録もされていない」

「やはりですか……両方ですか？」

「ああ」

コアは世界に467個しかない

そして世界で一人しか作れない

篠ノ之束博士

苗字だとわかんと思うがああ、あの幕の姉だ

という事はこれを作ったのは彼女だということだ

何のために？と今織村先生は頭の中で葛藤しているだろう

「平崎、お前何か知っているのか？」

「なぜ訊くんですか？」

「いや、お前は転生者で魔法使いだからな」

「せ、先生俺が魔法使いだからって何でもできると思っているで  
しょ」

「ふっ。まあな」

「でも、思い当る人ならいますよ」

「!」

「篠ノ之博士ですよ。あの一人不思議の国のアリスやっている人」

「アイツか………まて、なんでアイツが変な事をやっている事  
まで知っている？」

「俺は色んなことを知っていますよ、白騎士さん？」

「!どこでそれを知った？」

「どこでと聞かれましても。俺は魔法使いですから」

「なら、なぜあの時黒いISが来るのを知っている素振りをした  
んだ？」

「……聞かれてたか………」

ならば



「あ！あれは未来予知ですよ」

「……………そうなのか？」

案外この人騙されやすいのかな

「なら、今から私が何をするのか知っているのか？言ってみろ」

え？まじで

テイルズにもそんな魔術なかったし

作ってもすらいないし

「な、殴るでしょうか？」

「正解だ」

パアアアンツ！

何で！?!?!?!?

「次奴らのような物と戦うときはせめてコアの原型をとどめさせる。解析に手間がかかる」

「そ、そんな状態がヒドかったんすか？」

「グシャグシャだ」

……すません

「もういい、一旦寮に帰れ」

「はい、失礼します」

俺は来た道に戻る

千冬 side

まさか平崎がアソコまで知っているとは

それれより問題は奴のISの強さだ

あれは異常だ

だれが作ったのだ？

そしてどうやってあれほどの物を？

やはりあのバカに訊くべきか

千冬はポケットから携帯を取り出しある番号にかける

ブルルル、カチヤツ

速いな

「もすもす、終日？」

ブツツ

よしもう一回だ

次は常人であることを祈ろう

ブルル、ガチャ

「ヤッホ〜、皆のアイドル東さんだよ〜！」

ヤッパリ切ろう

「待つて、まって、き、切らないでえ！ちーちゃん！」

「はあ、いい加減その呼び方をやめろ」

「うん、わかったよちーちゃん」

まったく

「……………もういい。それで今回の無人機の件はやはりお前か？」

「うん、そだよあ」

やっぱりか

「何の為だ」

「うーん、そりゃヤツパリいっくんの為もあるよ。それより……」

「それより？」

「あの例の自称魔法使いくんに興味をそそられたんだよねえ」

「平崎か」

「うん！その子！」

「変な事するなよ」

「うん、大丈夫だよおっつと。会いに行くだけだから」

「……それが問題だろ」

現在東は世界各国、企業から最重要人物として追っかけまわされている身だ

「うんじゃあ、そのうちちーちゃんにも会いに行こうかな」

「好きにしる。じゃあな」

「うん、バイバイ」

勇也 side

ここは自室

「やっぱり俺か……」

俺は先程の会話を盗聴していた

めんどくさい人に見つけられたなあ

はあ今日もさんざんだな

こんな日常を送っている主人公の精神が知りたいわ

コンコンッ

俺は起き上がった

まさか

もう来たのか……………？

俺はショットガンを魔術で練成し構える

「ちょっと待ってください」

油断しているふりをする

開けるぞ

1

2

3！

パンツ！とドアを開け

銃を向ける

「動くな！！」

俺はポンプアクションを行いリロードし弾が入ってることを見せ付ける

「ひひひひひっ！！」

そこにいたのは

山田先生だった

「へ？せ、先生？」

「う、撃たないでください！！お願いします！！」

大声を出す山田先生

本当にこの人先生か？

ビビりすぎだろ

完全に小動物と化した山田先生を見る

「わかりましたから。叫ぶのやめてください」

俺は銃を消す

「ほ、本当ですか？」

「前みてください」

俺は手を上にあげヒラヒラと振る

「ほ、よかったです。てっきり脅されて部屋に連れ込まれるかと思いました」

「俺がそんなことする人にみえますか？」

「あ、それより重要な事があります」



「？」

「あなたのISのデータをIS学園に提供してください」

「なぜですか？」

「それは、全ての生徒の機体データを把握するためです  
なるほど

それで研究すると

「わかりました。明日渡しますので」

「あ、はい。わかりました」

たぶん来月の学年別トーナメントが関係してるんだろうな  
俺だけ最強じゃズルいからな

たぶんリミッターかけられるだろうな

でも、まだ使っていない魔術もくさるほどあるしな

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが……」

外から篠ノ之の声が聞こえる

何だ？

と思いドアを少し開け見てみると

「わ、私が優勝したら

」

「っ、付き合ってもらおう！ー！ー」

おお～

よく言った！

でも一夏の事だから勘違いしてそうだけど

これから面白くなりそうだ



第八話 苦勞、そして楽しさ（後書き）

ヒロインアンケートですが

今月が締め切りです

もっと要望をください!!!

第九話 平崎のお仕事（前書き）

なんか主人公が………

## 第九話 平崎のお仕事

六月頭、日曜日

俺は神様と一緒にあの白い空間にいる

「俺死んだの？」

「いやいや、まだだから」

手の平を横の振る

「じゃあ、何で俺ここにいるの？」

「私がよんだからじゃ」

「何で？」

「お前にある仕事をして欲しい」

「？何をするんすか？」

「殺しの仕事だ」

「却下です」

「え、何でよ」

「あたり前です！誰がそんな事するか！」

「いや、お前自分でまいた種を刈れよ」

「え？」

「殺してもらうのはお前の事をとっ捕まえようとしている奴らだ」

「で、でも何で殺す必要があるんだよ」

そんなのおかしい

そんな奴等ほっとけば良い事なのに

「お前、周りにも被害がおよぶかもしれないんだぞ」

「！」

それは

ダメだ

「夏や鈴や他のクラスメイトの顔を思い浮かべる

「覚悟はできたか？」

「……………誰を……………やるんだ」

「覚悟はあるらしいな。殺す人はコイツだ」

そしてホログラムの映像が出てくる

おお、最先端技術

「名前はハイドル・ファインだ。23歳、イギリスのデユノア社の研究者だ。キサマのISと魔術に目をつけている」

「で、どうすればいいの？」

「私はコイツをある閉鎖空間に閉じ込めた。このブリーフィングの後お前をそこに転送する。その後は自由だ。殺し方は気にしない」

「……………その後その人はどうするんだ」

「どうする？」

「え？」

「お前が決める。選択肢は三つ。一つ、その人物に関する記憶を



消す。一つ、死体を元の世界のどこかに放置する。一つ、手紙で家族だけに教える。」

「せめて……せめて家族だけにでも伝えてやるぞ」

「いいのか？」

「え？」

「場合によってはお前に変な疑惑がかけられるぞ」

「いいよそれで」

「そうか、では行くぞ」

「ああ」

俺は青い光に包み込まれ始めた

「あと」

「ん？なんだ？」

「気をつけるよ、勇也」

どうしたんだろう？行きなり

そして目の前も光に包まれた

そしてとある町に転送された

でも気持ち悪い

なんたって

どこにも人がいないんだから

「この中からみつけるってか？」

楽勝

俺は索敵魔法を発動させる

キイイイイイイイン!!!!!!!!!!

とまわりに波動が広がっていく

お、いた

それを端末に映し出す

ここから200m、

飛ぶか

俺はピリオドの羽だけを部分展開し空へとはばたく

そしてはるか先の大通りに人が歩いているのをみつけた

「やっぱ、殺さなきゃいけないのか？」

(ああ)

俺は飛び

やつの前に着陸する

「君は！あの例の魔術師か！？」

「まあね。でも今は」

『ウェツポングリエーター発動、鎌を練成』

そして握る



「俺も他の世界の住人だからだよ」

(やはりか)

どういうことだ!!

(こいつも少量だが魔力をもっている。気をつけろくるぞ……………)

「俺の真名はシュヴァリア!!人種は獣人だ」

何を言っている?

その後やつのが変形しはじめた

「へ?」

そして3mぐらいの狼人間になった

「まじか!!!!」

「はっはっは!!これが俺の本当の体だ」

「くそ!!」

俺はバックステップしさがる

そして先ほどまで俺がいたところに化物の拳が叩き込まれた

「死ぬのはお前だああああ」

そして走ってくる

(やはりか)

「何が?!?!?」

(私の考えたとおりだった。あの体には化物が憑いておる)

「さっきのシュヴァリエとかいう名前のやつがか?」

(ああそつだ)

「ってか、何で教えてくれなかったんだ?!?!?」

(100%じゃなかったからだ)

「どつすればいい?」

(殺す)

「それだけ変わらないんだな。憑かれている人はどつすればいい?」

(助けれるは、助けれる。でも大変だぞ?)

「殺すよりはましだ!?!?!さつさと教えるおおお!?!?!」

（お前が今持っている鎌でも可能だ。その鎌に魔力を溜め込め。そして弱っているところにガツンだ！！）

「弱っているところで事は途中まで普通に攻撃？」

（ああそつだ。ISオツケイ、魔術もオツケイだ）

「了解」

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動』

『ウェッポンクリエーター発動、銃』

俺は連射型ショットガンを両手に構え

「うし、いくぞ」

「こいいいやああああ！！」

お、おぞましい

俺は初撃を前方にダツシュしよけ



股の間を通り背中に銃を打ち込む

ちなみに弾いつもの散弾ではない

ショトガンでも使える大きめ単発の弾だ

「ぐぎゃあああ！！！！！」

そしてやつは回し蹴りをくりだした！！

(RPGゲームか！！)

俺は目の前に魔法で盾を作りふさごうと思ったが

「ぐっ！！」

重い

俺はそのまま建物に叩きつけられる

「がはっ！！」

そこへ狼人間の鉄拳

ガキン！！

即時作り出した二本の剣をクロスしふせぐ

「ここまでか魔術師？」

「うぐ……………」

正直キツイここまで強いと思っていなかった

そして奴は片方の腕をうえに振り上げた

まさか

「これで最後だ魔術師」

そして振り下ろされる

「まだまだあああああ！！！！！！」

俺は剣で受けている腕を右に弾き

体を捻りもう片方のパンチをよける

「何！？！？」

「これで最後だシュヴァリエ」

やつが俺に放った台詞をかえす

「くらえ！！」

『炎、中級呪文発動』

「イグニートプリズン！！！！！！」



な  
」

「は？まだやるの！？！？！？」

「もち  
」

「嘘だろおおおおおおお！！！！！」

頭を抱え地面に打ち付ける俺

「でも今回は運がよかったな。公になる前に閉鎖空間に閉じ込められたからな」

「え？じゃあ街歩いてたらもしかしたら、出てくるかもしれないの？」

「ああそつだ  
」

「まじか！あ、でも何で俺を狙ってきたんだ？」

「奴らはお前の魔力を狙っている。やつらにとって魔力を持つ人間を最高の美味だからな」

「それだけ？」

「それだけ」

「……………もういいよ。帰る」

「ああ、わかった。じゃあな」

そして気づくと俺の寮の自室だった

はぁ疲れた

俺は学食で食べて部屋に帰っている途中だ

そつえばあの中の人どうなったのかな

ちゃんと帰れたかな

まじいぜ

寝ろ

Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z  
Z

??.?.?.? side

「はい、はいわかっています」

電話で話している銀髪の女の子

「わかっています。今回の任務は

魔術師の確保ですね」

「わかりました、はい、では

ピッ

これもいい機会だ

教官を説得して本国でもう一度、

もう一度ご指導をしてもらう

そして

「織斑一夏」

「お前を私は認めんぞ」

そして拳を握り締めた



第九話 平崎のお仕事（後書き）

はいできました

主人公が凄い事に・・・

もうそろそろヒロイン決めようかと思えます

いい考えが！って思う人は早めに案ください

第十話 強すぎだろ（前書き）

ヒロインを決定しました！

この人たちです

鈴

ラウラ

更識姉妹

山田先生

クラリツサ

です！

アンケートに答えてくれた人

ありがとうございました！！！！

## 第十話 強すぎだろ

「今日はなんと転入生を紹介します！」

イキナリ山田先生

「「「「「え？」「」「」「」

この時期に!?!?!?

普通六月まできたら来学期まで待つだろ

「失礼します」

「……………」

そしてクラスに入って来た二人をみる

その内の一人が男性だった

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさんよろしくお願ひします」

「き……」

「き？」

こゝこれは

俺は前回の悲劇を忘れない

『聴覚を一時停止』

そして俺だけ無音の世界になる

目の前で女子が歓喜の声を上げているのがわかる

そして戸惑っている転入生、シャルル

そして

パンツ！

え？

呪文を貰いた？

「静かにしろ、まだ終わって言ないぞ」

鬼教官が言う

「……………挨拶をしろ」

「はい、教官」

ん？

俺はジョークでいったつもりだったのに

「ここではそう言うな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

さすが軍人

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツで作られた遺伝子強化体

人工合成された遺伝子から作られた人間だ

原作を読んでもからわかるが、かなりクールだ

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

.....

あまりにも静かなので山田先生が問う

「い、以上ですか？」

「以上だ」

「！貴様が

」

そして一夏の席の前に行き

パシンッ！

ラウラは一夏に、はたくをくりだした！！

（またRPGネタかよ）

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、みとめるものか」

言うね

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

そしてそっぽを向く

「ラウラ席はあの自称魔法使いの隣だ」

「お、俺は本当の魔術師だ！」

そして席を立ち反論する

「知っている。ジョークだ」

は？

あの織斑先生がジョーク？

クラス全員が啞然

織斑先生を知っているラウラまでもがビックリ

「ん？どうした？」

「い、いえ。何もありません」

そしてラウラと一緒に席につく

「よ、よろしく。ボーデヴィッツさん」

「……………ラウラでいい」

「んじゃよろしく、ラウラ」

「ああ」

案外友好的

まあ、でも一応用心

「ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でISの模擬戦を行う。解散！」

そして即刻席を立ち急ぐ

「待て平崎、織斑と一緒にデュノアの面倒を見てやってくれないか？あのバカ一人じゃあ心配だ」

またまた弟さんを心配している



「わかりました」

そして先行した二人を追いかける

「何があつたんだ？一夏」

「いやそれが……途中で女子にみつかって」

そう俺らの目の前には女子が廊下を埋め尽くしている

「おい、やばいぞ一夏。これで遅れたら俺ら……」

「ああ、確実に死ぬな」

「え？織斑先生ってそんなに怖いのか？」

シャルルが聞いてくる

「ああ。それと自己紹介が遅れたな平崎勇也だ」

「シャルル・デュノアです。シャルルってよんでね」

「おお、わかった。んじゃ俺も勇也ってよんでくれ」

「よしこれをどつする」

そして女性陣に指をさす一夏

「俺はここを抜ける方法知ってるぜ」

「何！教えてくれ」

「こつするんだ」

『転送呪文発動』

そして戦線離脱

この呪文はようするにテレポートだ

俺は二人を見捨て、第二アリーナの更衣室に入った

「お、早かったな」

「ゆ、勇也。よくも」

息遣いが荒いぞ、走って来たんだろっな

「速くしろよ授業始まるぞ」

俺は着替えをすましアリーナへとむかう

案の定一夏は先生に殴られた

「本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」  
なるほど

「今日は戦闘を実戦してもらおう。鳳！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで？」

「専用機はすぐに始められるからな」

「だからってどうして私が……」

「えー、何で私なのよ」

先生は二人に近づき

「お前らすこしはやる気をだせ。二人にいいところをみせれるぞ？」

キュピイイイイイイイン！

二人の目が光った

は？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会ね！専用機持ちの！」

「それで相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でもかまいませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

張り合う鈴とセシリア

「慌てるなバカども対戦相手は

平崎だ」

「「「「は？」「」「」

え？

「お、俺ですか！?!?!?」

「ああ。お前だ」

「何で元代表候補生の山田先生を使わないんですか！?!?!?!」

「最初はそれだったのだが、お前の実力をある程度知っておきたいからな」

「……………わかりました。そこまで言うのならいいでしょう。では」

「いいのか？」

訊いて来る一夏

「ああ全然問題無い」

「では全生徒に告ぐ。今すぐ観客席に避難だ」

「「へ？」」

変な声を上げる俺の戦闘相手

「そ、そこまで危険何ですか？」

「ああ。IS越しても一番弱い魔術を当てられたら体に傷がいくぞ」

「え！ウソ！！」

「本当だ。この私が身を持って体験したぞ」

そして生徒を誘導する織斑先生

『平崎できるだけ本気でヤレ、だが死者をだすなよ?』

「わかってます」

無線で返答

「死者って……」

びびる鈴

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動』

おなじみの魔術を発動させる

ISはもちろん羽根だけ

『ウェツポンクリエーター発動、ダガーチェイン錬成』

剣をにぎるとなぜかあの戦闘が脳裏に浮かび出す

そして同時にあの時の戦闘の高揚がでてくる

なぜかそれがイヤだった

「どうしたの？そんな顔をして？」

鈴が問う

「いや、何も無い」

「そう………」

悲しそうな顔をする鈴

『では、始める』

ドーンッー！



俺は始まった瞬間セシリアを吹き飛ばした

鈴 side

「え？」

横を見るとさっきまでセシリアが立っていた場所に彼女はいない

彼女は後ろでアリーナの壁にたたきつけられていた

「ウン……」

こいつに驚かされるのは何回目だろう

「おい、始まったばっかしだぞ。あまり失望させないでくれ」

「言うじゃない」

私は青龍刀を構えた

私が覚えているのは、ここまでだった

勇也 side

俺は本当に一瞬で戦闘を終わらした

「御満足ですか？織斑先生？」

『本気か？』

正直に言う

「いや、ぜんぜん」

『そうか……次は手応えがある奴にする。行け山田先生』

『え？わ、私ですか？……そ、そんな目で見ないでください、織斑先生！こ、怖いです！……うう、わ、わかりました』

『すぐに山田先生がそちらに行く』

そしてピットから出て来るラファール・リヴァイブを装備した山田先生

俺は武器をかえる

『ウエツポンクリエータ発動、鎌練成』

しばらくコイツに使い馴れないとな

「それが魔術ですか？」

「はい、そうですよ先生」

『では、始めろ！』

鎌で使えるかどうかわからんが

「魔人剣！」

俺は鎌を地面に擦り上へと振り斬撃波をとばす

「わっ！」

山田先生はビックリし上へ飛翔する

「あ、危ないじゃないですか平崎くん！」

「すみませんね、先生。できるだけ本気でやねって言われてるんでね」

「うっ……」

うなだれる先生

その隙をつき

「弧月閃!!」

飛び、三日月を描く様に上に切り上げる

それをリヴァイブの物理シールドで防ぐ

「ぐっ」

「さすがにキツイですか」

「まだまだです」

そして鎌をハジき距離を取りライフルを展開する先生

そして連射

俺は右、左へと動きかわす

そして先生の後ろをとる

「天雷鎌!!」

鎌に雷をまとい振り下ろす

「ぐ!!」

また距離をはなす先生

待ってたぜ

「くられ!奥義!鳳凰天駆!!!」

鎌と体を炎でまとい急降下し先生にタックルをかまして斬る

「ぐっ!!!!」

落ちて行く先生

「あ!」

俺は先生の下に回り込み

体に引き寄せられる

「きゃっ!!」

驚く先生、そして暴れる

「ちょ！せ、先生あんましジタバタしないで！前見え無い！」

先生が騒いでるのも無理は無い

山田先生は今平崎にお姫様抱っこをされているのだ

「あわわわわわわわわ」

顔を真っ赤にしている山田先生

風邪か？

（バカだな）

？何だ神様？

（イヤ、何も無い）

「と、とりあえず降ろしてください！」

「あ、はい」

俺は山田先生をおろす

その後皆が観客席からやつくる

「はあ。お前は相変わらず最強だな」

呟く織斑先生

ラウラside

あれが魔術

強い、強いぞ、最強だ

教官に汚点を与えた織斑一夏

あれがあればヤツをひねり潰せる

それよりも魔術を使える平崎勇也とは何者だ？

勇也に興味を持ち始めたことを自覚していないラウラ

（さあ、勇也は今から忙しくなりそうだな）



## 第十話 強すぎだろ（後書き）

やっとヒロインが決まったのでこれからこの道で進めていきます！

そして新アンケートです！

主人公のISのセカンド・シフトを考えたのですが

武器を一個ぐらいつけた方がいいかなあ、と思います

ってわけでこんな武器あったらいいなあ〜

とおもう武器、案ください！

最強でもおkです！！

もしかしたらそれをベースにして武器をつくるかもしれない

作者は想像力が乏しいのでぜひぜひ協力してください！

ストーリーでもおkです

## 第十一話 まきこみ

「ここで我がIS学園の職員の実力を知って欲しかったのだがな。まあいい。これで皆もこいつの実力がわかっただろ？まやみに変なケンカを売ってオルコットの二の舞にならないようにな」

と織斑先生

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機がやれ」

「あの、先生！」

一人の女子生徒が言う

「平崎くんはどうするんですか？」

そうだ、俺の名前が入ってなかった

「平崎は魔術とISを両立した戦い方をするからお前らの参考にはなれんからな。他の奴の助手でもやってもらう。いいな、平崎」

「了解です」

返答する俺

「出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！」

そして実習が始まった

「やったあ。織斑君と同じ班っ。苗字のおかげね」

「うー、セシリアかあ……さっきボロ負けしたしな」

「鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ」

「チュノア君！わからないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！」

何地味にアピールしてんだよ

この学校の中でフリーじゃない人っているのか？

ちなみにラウラの班は……

「……………」

唯一おしゃべりが無い

ってか空気が重い

そこで山田先生が

「いいですかーみなさん。これから訓練機を一斑一体取りに来てください。数は打鉄が三機、リヴァイブが二機です。好きなほうを班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよ」

ちよっとできる女になっている山田先生

「平崎」

後ろから織斑先生に話しかけられる

「何ですか？」

「ちょっとボーデヴィツヒの班を助けてやってくれないか？」

ふとソチラを見る

暗い、いや黒い

機体はリヴァイヴか

「とりあえず、アイツが実習をできる空気にしてくれ」

「わかりやした」

そしてあの班に向かう

「あ！ゆうゆうだ！」

のほほんさんこの班だったのか

「ああ。ここの眼帯少女の助手をしに来た」

フンツと鼻をならしそっぽを向くヲウヲ

「助けなどいらん」

「織斑先生の命令だ」

「ぐっ……」

さすがにあの人に逆らえないか

「し、しょうがない。ならば手伝え」

そう言いリヴァイヴの説明をし始めるヲウヲ

なんだよちゃんとできるじゃないか

なぜか父親てきな目で見てしまう

「おい平崎」

「勇也でいい」

「……じゃあ、勇也コイツの動きをみてやってくれ」

「あゝ」

軽く適当な返事をする

実習が終わり俺はラウラと一緒にリヴァイヴを返しに行っている

先程山田先生が手伝うと言い張っていたのだがラウラが大丈夫だの一点張りだった

「なあ、勇也。お前はどうかやってあれ程の力を手に入れたんだ？」

「あれ程って？」

「とぼけるなー!!」

いきなり大声で言われたので飛び上がった

「ISを一撃で沈める技など聞いた事が無いぞ」

「あ、あれは魔術だ」

「それは何なのだ？」

「何なのだ？と聞かれてもな。何でそれほどまでして知りたいんだ？」

「私は……力が欲しい。いつまでも頂点でいる為の……」

うつむくラウラ

あれこの人って案外インキヤラ？

「俺がなぜ魔術を使えるかはわからないけど、ラウラにとって力って何？」

「力とは……すなわち攻撃力だ」

なんか、ストレートすぎる

「あつそ……」

（おい！！平崎！！）

ん？神様か。どうしたの？そんな焦って

（新しい奴が来たぞ！！）

は！？！？

(今すぐそっちの空間に転送する)

ちょっと待て!!今日の前に友達が!!!

(知ったこつちやねええ、行くぞ!!!)

「嘘だああああああ!!!」

「ど、どうした!!!いきなり」

「へ?」

俺らの足元には魔方陣が描かれていた

そして光だし

俺らは飲み込んだ

「まじか!!!!!!」

「何なのだこれはああああああ!!!」

そして転送



俺が今いるのは森林地帯だった

(今回の敵は単体だけど、ザコを大量生産できる能力を持ってるよ)

「了解。それより訊きたい事がある」

(何だ?)

「何で……………何で、ラウラがいるんだ?」

(ついでだ、ついで)

「嘘つけ」

(バレタか。実はお前の近くにいたからだと思う)

「おい、勇也何さつきから一人で喋っている」

俺はラウラの肩をつかみ

「……いいか、ラウラこれから起こる事はすべて事実だからな」  
「ど、どうしたいきなり」

「今から俺らは意味にわからない化け物と戦う事になる」  
「は？」

さすがに信じられないか

まあ、いい

『身体強化呪文発動、超感覚呪文発動』

「神様、一度でもいいからこの眼帯ちゃんに説明してくれ」

(わかった)

ええ？まじで？

ポンッ！

という音とともに現われた神様

「よっ」

「本当に来ちゃったよ」

「……！」

ラウラがおどろく

「だ、誰だコイツは!!!!」

「今から彼方に状況説明をするガイドさんだよ」

そして、かくかくしかじか

「なるほど。お前はその異形の者と戦っているわけか」

「ってかさあ、何か名前つけよつぜ、俺らで」

神様ナイス提案

「化け物はどうだ？」

「そのまんますぎるだろ、ラウラ」

「ヴァリアントなんてどうだ？」

「神様、それもストレートすぎるけど……響きが良いね」

「ヴァリアント、英語で異形か……」

ラウラが納得する

「それよりラウラ、お前も戦うのか？」

「あたり前だ。私だって軍人だ。銃をよこせ」

そして手を出す

「何が欲しい？」

「何でもいいのか？……じゃあ、G36をたのむ」

そして、練成

完成

「ほらよ」

「これ、本物だよな」

「ああそつだぞ。何か問題があったのか？」

「いや、何か……簡単すぎてビックリしている」

「魔術ってそんなもんだ」

俺は周りにセンサーを張り巡らしているが

ちょうどさっき何かが入って来た

「来た？」

「ああ、やつこそさんがおでませ」

「今回はザコを大量生産できる能力を持っているからヤツカイだぞ。本体をたたかないと永遠と湧き出るぞ」

「りょうかい、っと」

「ああ、じゃあ帰えるな」

そして、消える神様

「勇也、先程の奴何なのだ？」

「友達だ」

「神様とか言っていたが？」

「あ、あだ名だ」

「変わった名だな」

その時草むらから小さな狼が飛び出しラウラに襲い掛かるうとしたが  
あっけなくラウラにヘッドショットをきめられた

「さ、さすがだな。軍人さん」

「私はドイツでも部隊長だったからな」

「よし！ラウラは右からくるチビ狼をたのむ！俺は左を薙ぎ払っている内に本体を見つける！」

「わかった！」

そして俺らはお互いの背中を背中につけ周りながら撃つ、斬る、撃つ、斬る、撃つ、斬るを繰り返している

自分が考えても、なかなかいいコンビネーションだと思っ

「やるじゃないか、勇也」

「お前もな！」

そして最後の一匹を真っ二つに斬る

「ふう………」

「これで………終わりなのか？」

「いや、まだまだ。本体がみあたらない」

「ふふ……でしょうね、だって私ここにいるもん」

そしてそいつは木の陰から出て来る

「こんばんは。魔術師さんと、隊長さん」

「！お、お前は」

「どうした知り合いか？」

「ああ、私の部隊の福隊長だ」

「え？」

「なぜだ、なぜお前が、敵何だ」

クラリツサ大尉！！」

「ふふっ、あそびーましよ！隊長！！」

クラリツサが不敵に笑った



第十一話 まきこみ（後書き）

クラリツサどんな登場にしようかと迷っていたら

突然こんな感じになった

## 第十二話 目を覚ませ!!

「我が名はラリス！平崎勇也、貴様の魔力を喰らいにきた！」

そしてラリスの影から小さな狼が出てきた

「またかよ!!」

そして鎌を構える

「ま、待て！勇也!!」

「どうした!」

「や、奴を殺すのか？」

「いや、体からヴァリアントを追い出す」

「ちょっと、私抜きで話すすめるのやめてくれる?」

ケラケラ笑いながら言うな、怖いわ!!

狼の突進や噛みつく攻撃を避けつつ話す

しかし、これでは埒があかない

たまにラウラが援護してくれるがそれでも向こうも俺と大して状況

が変わらないはずだ

だが、彼女は必死にクラリツサに話しかける

「クラリツサ大尉！！何をしている！目を覚ませ！」

「誰それ？キャハハハハ！」

とチビ狼を召還しながら言う

「さつさとアイツを元に戻せえ！」

俺に怒鳴るな

「落ち着け、なんとかするから」

「落ち着いていられるか！！」

歯をむき出しにして言う

なんか猫みたいだ

でもどうしよう

元に戻るの簡単だがこのチビ狼のせいで近づけない

魔術を使って一掃するのもいいが万が一クラリツサにあたってオーバークイルしてしまったらな

— 大事だ

「なら……おい！ラウラ」

「何だ！」

「ちょっとこっちに來い」

俺はラウラの耳に顔を近づける

ゴニョゴニョゴニョ……………

「わかった、試してみる価値はあるな」

ニヤツと笑うラウラ

「うし、行くぞ！」

ラウラはライフルを乱射しつつ突撃

「なになに？突撃？くだらねえ！」

ラリスは狼を召喚だがあっけなくラウラにより打ちぬかれる

そしてクラリツサの前にたどり着く

「へえ、隊長は伊達じゃないねえ」

「クラリツサ大尉！元に戻れ！」

「だから無駄だっって言ってるじゃん」

そして懐から拳銃をぬく

それに対してライフルを構えるラウラ

「クラリツサ大尉、私は貴官を撃ちたくない」

「あっそ、じゃ死ね」

そしてラリスが引き金を引こうとしているとき

『ウェツポンクリエーター発動』

俺は手の内でスナイパーライフルを錬成

「よしそのままだぞ。ラウラ」

作戦はこうだ

ラウラが突撃し気を引く

そして俺が後ろから俺が魔力で作った弾で元に戻す

「よし……………今だ！」

俺はトリガーをしぼる

「バレバレなんだよ！」

そう言っつて弾丸をかわすラリス

「簡素な作戦だな！！」

いや、まだだ

「今だ！ラウラ！！！！！」

そして足につけてあったナイフを抜き構える

「なっ！！！」

そうこれは二重の作戦なのだ

そして今ラリスは弾丸をかわして無理な体勢にある

よけない

「うおおおおお！！！！！」

そしてナイフを刺す

「ぐっ！！！」

ドスツと鈍い音をたてて刺さる

「これで終わりだ」

「ふふ……いや、まだだ。私を刺しても元には戻らないぞ」







ストン

また落下

もういい加減慣れちゃうんじゃないのか？

っと思ったらもう到着

ラウラがいまだ何が起こったについてこれなくてキョロキョロしている

「おい！クラリツサはどこだ！！」

俺の服をつかんでゆさぶる

や、やめる気持ち悪い

「神様が何とかしてくれてるよ  
たぶん

「その神様とやらも信用できるんだろっつな！？！？」

「いいから、落ち着け！」

俺はラウラの腕を持ってひっぱがす

「ああ……………すまない」

「いいか？先ほどの戦闘は他言無用だぞ、わかったな？」

「ああ、もちろんだ」

よし

「今は……昼休みか。時間はたいして進んでないな、なあ一緒に学食いこうぜ」

「わかった」

その後俺らは  
カフェテリアに移動した

「あのすいません」

「ん？なんだね？」

返答する学食のおばちゃん

「オハチください」

は？ラウラ何言ってるんだ？

「？……ああ、おはしかい？」

そしてみせるおばちゃん

「はい、それです」

そして受け取る

このとき後ろの女子が可愛さに悶えていたのは余談である

**第十二話 目を覚ませ!! (後書き)**

武器アンケートありがとうございました!!

読んで楽しかったです

その内採用させていただきます

## 第十三話 行きたいけど

あの戦闘から五日がたった

本日は土曜日

目の前でシャルルと一夏が模擬線を行っている

言うまでもないが当然シャルルの勝利。

オールラウンドの機体に負けるのは当然だ。

近接格闘形じゃぶんがわるい

只今シャルルが一夏に後付装備や瞬間加速の事について話している

実は俺はというと

「準備はよくって?」

空中待機している鈴とオルコットから無線ごしに声が聞こえる

そう、この前約束していたどちらが一夏の訓練に付き合っただ

さすが恋する乙女、気迫がスゴイ

「んじゃ行くわよ！」

「かかってこい！！！」

忍刀を構える俺

そしてピットを放つオルコット

まあ、予想どおりだな

右に動きかわすが、そっちの方向から鈴が青龍刀を構えてやってくる  
すぐそっちに刀をもって行き鈴の初撃を防ぐ

「やるじゃない！」

「これぐらいどうって事ないね！！」

「じゃあ、もっとキツクしてあげる」

ちなみに俺のハンデはISの使用禁止、中級魔術の使用禁止なのだ

まあ、下級魔術でも十分すぎるんだけどな

「そこー！」

オルコットの主武器から青いレーザーが出る

もちろん体をひねってかわすが、

「ぐ………」

腰が痛い

「あれ、をかわすのですか。まったくどんな体をしているのですか」

半ばあきれて言うオルコット

「なら、見てみるか？脱いでやるぞ？」

「なっ！」

顔を真っ赤にして照れる

「なななな何を言っているのですか！？！？不謹慎もはなただしいですは！！！」

そう言い俺に近づき始めた鈴のISを蹴り後ろに飛ぶ

そして先ほど俺がいた場所にレーザーが飛んでくるのだが、今そこには距離を取った俺を追いかけようとしている鈴がいる

ガンッ！

「あだっ！」

見事に背中に当たる

「ちよっと！！よく見て狙いなさいよ！」

「そこにいる鈴さんが悪いのですわ！」



そう俺の考えは仲間割れを起こさせることだ  
俺は気づかれないように魔力を練り、呪文の準備をする

「よし、くられ！ライトニング！！！」

緑色の稲妻がオルコットにクリーンヒットした

「いやあああああ！！！！！」

バリバリバリバリという音を立て、苦しむ

そして地上に落ちる

一人、ダウン

「しまった」

俺に作戦に気づいた鈴が俺に突進をしかけようと近づいてくる

だがこれは想定内

俺は前方に地面に魔方陣を書いてある

そしてそれを鈴が踏む

「トラップ呪文発動！グレイブ！！！」

地面から長細い岩が地面から出て鈴を攻撃する

そして二人目もダウン

「おっれのかち〜」

手を頭の後ろで組み笑う

よって一夏にISを教えるのは俺とシャルルになった

一夏に近寄るとシャルルが射撃武器を一夏に貸して試し打ちしていた

大丈夫なのかな？

ま、

いっか

俺はアリーナの端の日陰で休もうとしたが  
そこへ

ISをまとったラウラがアリーナに入ってきた

「おい」

「なんだ？」

ここからでもISのオープンチャンネルの声が聞こえる

確かこの時のイベントって……

割り込みますか……!!

「私と戦え」

「また今度な」

「ふん。ならば 戦わざる得ない状況にしてやる!!」

そして肩にあるレールカノンをリロードし撃つ

ドカンッ!

「やれやれ、何やってんだ? ラウラ」

一夏の前にいたのは勇也だった  
しかも無傷で砲弾をシールドで防いでいた

「そこをどけ!!」

「いやだね」

「お前を攻撃したくはない、そこをどくんだ!!」

『その生徒! 何をやっている、名前とクラスを名乗りなさい!!』

スピーカーから先生の声が聞こえる

「くっ、今日はひこっ」

そしてピットの奥に消えてゆくラウラ

「……………」

アイツ、本当に一夏の事恨んでるんだな

「一夏、大丈夫か？」

「ああ、ありがとう」

「今日はもうあがるっか。四時を過ぎたし、どのみちアリーナの閉鎖時間だよ」

いつも通りの人懐こい顔で言う

「ああ、そうだな」

そして俺と一夏はISを解いて更衣室へと向かう

「んじゃ、お先」

「ああ」

「じゃあね、勇也」

二人を後にして部屋へと戻る

それじゃ、どうしようか

部屋に戻ったはいいが

何もすることが無い

いまは四時ちよつと過ぎだからカフェテリアもまだ開いていない

暇だから武器の錬成でもやっつくか

何つくろっかな

四連ロケットランチャーとかどうだろうか？

うし、それでいいんか

『ウェットポンクリエーター発動』

コンコン

「はい？」

「山田ですー」

「開いています」

「失礼しまー」

そして俺が握っているものを凝視して固まる

しまった

今の俺の手の中には高校生が絶対に持ちそうに無い物を持っているからだ

俺は錬成したいどうも思っていないが

いきなり手の中にロケットランチャーを出現させ部屋の中がかついでいる人なんてそうそういないはずだ

「失礼しました」

そして扉を閉めようとする先生

「ちよっ！待ってください！！」

俺は閉まろうとするドアに脚を入れ止める

「わたしは何も見えてません！わたしは何も見えてません！わたしは何も見えてません！！！！」

呪文のように言い出す先生

「先生落ち着いて！」

「あつあつ……」

「まず部屋に入ってください」

「はっ！もしかして平崎くん、エッチなことを考えているのですか？」

「何でそうなるんですか！？」

「それは女子に興味が無いということですか？それはそれで問題のような……」

「もういいです、それで何用でここに来たのですか？」

「あ、そうでした。今月下旬から大浴場が使えるようになりまして。男子は二回の使用日を設けることになりました」

「了解です」

「あれ？喜ばないんですね」

「ええ、なぜ訊くんですか？」

「いえ織斑くんは大はしゃぎしてましたので……」

ああ

確かあいつ風呂好きだったっけ？

「あのお、それより……」

「？」

「き、今日一緒に夕食食べませんか？」

妙な上目使いで言われる

何か断り辛い

別に今日はこの後これと言って用事は無いしな

「はい、別にかまいませんよ？」

「ほ、本当ですか！？」

「あ、はい」

「じゃ行きましょう」

「わかりました」

そして俺と山田先生は食堂へと向かった



「では、明後日」

「はい、おやすみなさい」

俺らは食事を終わらせ（ちょっといろんな意味で大変だったが）  
寮の前で別れた

「あ！そうだ、一夏にマンガ貸したままだった」

うし

取りに行こう

「あ一夏」

俺は廊下で一夏を見つけたのだが

両腕をセシリアと箆につかまれて歩き辛そうにしていた

「何やってんだ？」

我ながらごもつともな疑問だ

「食堂に行くんだよ」

「その三人で？」

「ああ」

「そうですわ」

「食堂に行くのはいいんだが、邪魔だぞ」

「「!!」」

やっと気づいたか

後ろにもお前らがさっそと行くのをまっっている人もいるんだぞ

「まあ、いいか。それより一夏前貸したマンガ返してもらっぞ」

「ああそれなら部屋にあるぞ」

「んじゃ行って取ってくるわ」

「え？い いや後で来てくれ」

「いや今行くよ、たぶんシャルルがいるだろうしね」

「あ、待て……………」

俺は三人を抜かし部屋に行く

あれ？

このイベントって確かシャルルが女ってバレタときのやつだよな

い、行っていいのかな？

第十三話 行きたいけど（後書き）

新しい小説を一個始めました

そっちもよろしくお願いいたします!!

第十四話 はあ……（前書き）

もうすぐお気に入りに入り100件だ!!!

うれしいです

ありがとうございます

第十四話 はあ……

只今、一夏とシャルルの部屋の前

「どっしょ……」

部屋に入ろうか迷っている

あの漫画結構大事にしてるしなあ

「やっぱり、明日にしよう……」

そして回れ右をして部屋に戻ったのだった

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

月曜の朝、は一夏と一緒に廊下を歩いていたが

クラスから大きな声が聞こえる

「なんだ？」

「さあ」

そして教室に入ると

女子が机に集まっていた

「本当だつてば!この噂学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別  
トーナメントで優勝したら織斑くんか平崎くんときあえ

」

「おれらがなんだつて？」

「」「」「きゃああつ!？」」「」

「どうした？」

「夏が首を傾げて問う」

「じゃ、じゃあ私クラスに戻るはね」

そして鈴が慌てるようにクラスへと戻る

「なんなんだ」

「さあ……」

放課後



「「あ」「」

二人揃って間の抜けた声を出す。時間は放課後、場所は第三アリーナ  
その二人は鈴とセシリアだった

「奇遇ね。あたしはこれから月末のトーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

そしてなぜか火花がちる

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のこともあるしね」

「あら珍しく意見一致しましたわ。どちらの方がより強く優雅であるか、この場ではつきりとさせんしょうか」

二人とも同時メインウェッポンを呼び出す

と、いきなり目の前を超音速の弾が飛来する

「「!?!?」「」

回避した後弾が飛んで来た方を見る

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……」

「どういづつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

ラウラの挑発的な物言いに顔がひきつる

「何？やるの？」

「とつとと来い！」

「上等！！」

「一夏、今日も放課後するのか？」

「ああ、もちろんんだ。今日使えるのはええと

」

「第三アリーナだよ」

「そうか、んじゃ行くか」

そして俺と一夏とシャルルは廊下を歩いてアリーナに向かおうとしたが

「なんだ？」

女子が（つつつか女子しかいないんだけどな）ものすごく慌ててアリーナの方に向かっている

その中で俺はのほほんさんを捕まえ

「どうしたんだ？」

「ん、なかね、代表候補生が模擬戦やってるらしいんだよねえ」

「そうか……………織斑先生呼んで来い」

「んじゃ、わかったよ〜」

そしてダルダルの袖で敬礼しどこかへ走り去って行く

アリーナに到着すると鈴とオルコットがボロボロになってアリーナの端っこに横たわっていた。そして今はシャルルと一夏がラウラと戦っていた

「どうした？」

「織斑先生……」

後ろから駆け寄って来たのは先生だった

「何があった？」

「多分ラウラが鈴とオルコットをボコツて、それを見てキレた一夏が何も考えず突っ込んだんだと思います」

「まったくあのバカどもは……」

気苦労が絶え間せんね……

「行くぞ」

「へ？どこに？」

「あいつらを止めにだ」

「は、はぁー……」

「武器をよこせ」

「え!？」

「いいから、よこせ。何でもかまわん」

「じゃ、じゃあISの打鉄のブレードを」

と、半分ジョークでいったつもりだったんだが

「わかった」

……

持てるのかなぁ

「よし、行くぞ」

「は、はい」

「で、どうやって行くのだ?」

「考えてなかったんすか!？」

「ああ。お前だったら何でもできそうだしな」

「……わかりました」

俺は織斑先生の手をガシツと掴む

「！！！！！！」

「？どうかしましたか？」

「い、いや何も無い」

「そうですね、では行きます！！」

そして跳ぶ

「な！？！？」

俺と織斑先生は絶賛飛行中だ

「どういづつもりだ！？」

「ヒーローは遅れて空からやってくるもんだよ」

「フツ、なるほど」

かき乱れる髪を耳に掛け言っ

「行くぞ」

「はい」

「面白い、かかってこい」

指をクイクイっと招く様にする

「行くぞ!」

「夏とラウラが今ぶつかろうとする時

「オラア!」

「はっ!」

ガキイイイイン

「「な!!」」

俺は一夏の剣を

織斑先生はラウラのプラズマブレードを受け言う

「まったく、次あれをやる時はせめて言ってくれ。気持ち悪い」

「って言いつつ楽しかったんじゃないんですか？」

「ま、まあな／＼／＼／＼」

「勇也！」

「教官！」

そしてラウラの剣をはじき言う

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

周りが俺らに驚いているのがわかる  
空いた口がふさがらないという奴だ

「この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるなら」



「織斑、チユノアもそれでいいな」

「僕はそれでかまいません」

「では学年別トーナメントまで死闘の一切を禁止する。では解散  
!」

只今鈴とオルコットが傷だらけだったため保健室にいる

「お前らバカだなあ」

「バカって何よバカって!バカ!」

「勇也さんこそバカですわ!」

「二人とも落ち着こうぜ」

一夏がなだめようと手をあおう様に動かしている

「あ、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら」

ドンドンドンドンドンドンドンドン………!

じ、地響き!??

「な、何だ?」

ドンッ!

いや、ドカーン!と表現した方が良いな  
扉がかわいそう………

「織斑くん!」

「勇也くん!」

「チユノアくん!」

入って来た、女子が

いや、なだれ込んで来たの方が正しいか

「ななななな、なに、なに???」

「なんなんだ!？」

「ど、どうしたの、みんな……ちょっと落ち着いて」

「」「」「これ!」「」「」

そおして一枚の用紙を突き出す

「なになに」

俺が読み上げる

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締切は

』」

「ああ、そこまででいいから!とにかくっ!」

「私と組もう、織斑くん!」

「私と組もう、勇也くん!」

「私と組もう、ヂュノアくん!」

「「え、えつと……」「」

俺と一夏は戸惑う

どっしょ……

「わ、悪いな。俺はシャルルと組むから諦めてくれ!」



「「「「「」」」」」」

なんかあ、  
きまずいいいい！……！

「そ、そう。じゃ、じゃあ他の子と組むのは無理だね」  
シャルルが助けてくれた  
ナイス！！

「そうなんだよ、あはははははは」  
と、頭をかきつつ枯れた笑い方をする  
そしてゾロゾロと女子が去ってゆく

「ふーっ……」

「ちよつとアンタ、あのドイツ人と組むって本当なの？」

「……ま、言ったからには責人とらないとな」

「あの場しのぎかよ」

「じゃあ、そんななら私と組なさいよ……！」

鈴が俺に指をズバツと指して言う

「ダメですよ」

「おわっ!?!」

「あ、山田先生」

「あ、はい。こんにちはです」

そしてペコリと頭を下げる

そして、山田先生が淡々と説明して行く

どうやら、鈴とオルコットのESはダメージレベルがCを超えていて、トーナメントの出場を許可できないそうだ

「……………わかりました」

「わかってくれて嬉しいです」

つ、疲れた（精神的に）

俺は現在ラウラと一緒に晩飯を食堂で食べている

「それで、お前は私と学年別トーナメントに出たいと」

「うん、ラウラもペアいないんだろ？」

「ああ、そうだ。私もお前と組もうと思っていた所だ」

そう平然とした顔で言われるとなんか恥ずかしい

「んじゃ、またよろしくな」

「ああ。よろしくたのむ」

俺らは食券を買いならぶ

「すみません、オハチください」

「おはしだよ、ラウラちゃん」

「すみません、また間違えてしまいました」

おばちゃん、何回間違えたのこの子？



第十四話 はあ……（後書き）

ひさしぶりの投稿……

最近他の事をやり初めて……さいしんが……

しかも今回かなりはぶいてしまった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3371x/>

---

IS 魔法使い転生者in IS world

2011年12月22日23時47分発行